

しも　きた　かた　しも　ごう　だい　ご　　い　せき
下北方下郷第5遺跡

平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金対象事業発掘調査報告書



2016

宮崎市教育委員会

しも　きた　かた　しも　ごう　だい　ご　　い　せき
下北方下郷第5遺跡

平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金対象事業発掘調査報告書

2016

宮崎市教育委員会

卷頭カラー



下北方下郷第5遺跡俯瞰写真

序　　文

本書は平成25年度に実施された、下北方下郷第5遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡が所在する下北方丘陵は、旧石器時代から近世にかけての遺跡が密集していることから、周知の文化財包蔵地「下北方遺跡群」として指定を受けております。また、こうした歴史的遺産を後世に伝えるため、本市では開発事業に伴う発掘調査・保存活動に取り組んでいるところです。

今回の発掘調査では奈良・平安時代の堅穴建物が検出され、下北方地区が7世紀～9世紀に一大居住域であったことを再確認する成果となりました。本書の成果が広く市民のみなさまに活用され、地域の歴史や文化に親しむ上での一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力頂いた皆様に感謝申し上げると共に、今後とも本市の文化財保護行政にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月

宮崎市教育委員会
教育長　二見　俊一

例　　言

1. 本書は平成25年度に実施した、国宝重要文化財等保存整備費補助金対象事業（宮崎市市内遺跡）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、宮崎市教育委員会文化財課が民間事業者から依頼を受け実施した。
3. 現地における発掘調査、室内整理作業は以下の期間実施した。
発掘調査：平成26年2月3日～平成26年3月20日
整理作業：平成27年2月1日～平成27年3月25日、平成27年5月11日～平成27年8月31日
4. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会 文化財課

(平成25年度)

調査総括	課　長	橋口 一也	調査総括	課　長	橋口 一也
	課長補佐	山田 典嗣		課長補佐	日高 貞幸
	副主幹兼埋蔵文化財係長	島田 正浩		副主幹兼埋蔵文化財係長	島田 正浩
調整事務	主　　査	鳥枝 誠	調整事務	主　　査	鳥枝 誠
調査担当	技　　師	河野 裕次	庶務担当	主任主事	谷口 広清
	嘱託員	川野 誠也	整理担当	技　　師	河野 裕次
				嘱託員	沼口 常子

(平成27年度)

調査総括	課　長	日高 貞幸
	課長補佐	小窪 裕俊
	埋蔵文化財係長	井田 篤
調整事務	主　　査	鳥枝 誠
庶務担当	主任主事	谷口 広清
整理担当	主任技師	河野 裕次
	嘱託員	沼口 常子

5. 現地における測量はトータルステーションを用いて行ない、個別の遺構実測図は1/20・1/10で作成した。また、個別遺構の写真撮影については6×7判モノクロ・リバーサルフィルムと35mmモノクロ・リバーサルフィルムを併用した。
6. 現地における実測は河野、川野、秋成雅博が行なった。
7. 現地における空中写真撮影は（有）スカイサーベイ九州に業務委託した。
8. 本書に掲載した遺物の実測及びトレースは河野の指導の下、沼口、整理作業員が分担して行なった。
9. 本書における土色の表記は『新版 標準土色帳』に依拠した。
10. 本書における遺構略号は以下の通りである。
SA：竪穴建物 SC：土坑 SE：溝状遺構 SH：柱穴
11. 本書で示す方位は全て真北を示す。
12. 発掘調査により出土した遺物、及び調査における図面、写真、記録等は宮崎市教育委員会で保管している。
13. 本書の編集は河野が行なった。

本文目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境1
第2節 歴史的環境1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過	
第1節 調査に至る経緯5
第2節 確認調査の成果5
第3節 調査の経過5
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 調査成果の概要7
第2節 基本層序9
第3節 縄文時代早期の遺構9
第4節 古代の遺構と遺物9
第5節 中世の遺構と遺物28
第6節 その他の遺物28
第Ⅳ章 まとめ41

插 国 目 次

第1図	周辺遺跡	2
第2図	下北方遺跡群	3
第3図	調査区位置図	6
第4図	確認調査出土遺物実測図	7
第5図	基本層序実測図・構造配置図	8
第6図	縄文時代早期出土石器実測図	9
第7図	竪穴建物1・6実測図、出土遺物実測図	
		10
第8図	竪穴建物9実測図	11
第9図	竪穴建物8実測図、出土遺物実測図①	12
第10図	竪穴建物8出土遺物実測図②	13
第11図	竪穴建物8出土遺物実測図③	14
第12図	竪穴建物8出土遺物実測図④	15
第13図	竪穴建物8出土遺物実測図⑤	16
第14図	竪穴建物8出土遺物実測図⑥	17
第15図	竪穴建物8カマド実測図	18
第16図	竪穴建物8カマド出土遺物実測図	19

第17回	堅穴建物2・3実測図、柱穴遺物出土状況実測図	20
第18回	堅穴建物2・3出土遺物実測図	21
第19回	堅穴建物10・14実測図、出土遺物実測図	22
第20回	堅穴建物14出土遺物実測図	23
第21回	土坑15実測図、出土遺物実測図	25
第22回	溝状遺構実測図、土層実測図	26
第23回	溝状遺構出土遺物実測図	27
第24回	柱穴出土遺物実測図	28
第25回	土坑5実測図、出土遺物実測図	29
第26回	その他出土遺物実測図	30
表 目 次		
第1表	堅穴建物一覧表	24
第2表	出土土器観察表①	31
第3表	出土土器観察表②	32
第4表	出土土器観察表③	33
第5表	出土土器観察表④	34
第6表	出土石器計測分類表	34

表 目 次

第1表 竖穴建筑物一覧表	24
第2表 出土土器觀察表①	31
第3表 出土土器觀察表②	32
第4表 出土土器觀察表③	33
第5表 出土土器觀察表④	34
第6表 出土石器計測分類表	34

圖 版 目 次

図版1 調査区空中写真、縄文時代早期遺構、遺物	35
図版2 古代遺構、遺物①	36
図版3 古代遺構、遺物②	37
図版4 古代遺構、遺物③	38
図版5 古代遺構、遺物④	39
図版6 古代遺構、遺物、その他の遺構、遺物	40

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本書で報告する下北方下郷第5遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地「下北方遺跡群」に含まれている。下北方遺跡群は宮崎市街地の北西部、大淀川左岸に立地する下北方丘陵上に位置する。下北方丘陵は宮崎市北西部の垂水台地から南に向かって派生する、宮崎層群を基盤とした丘陵である。丘陵の西側には大淀川が流れおり、かつては丘陵の南側を東流する大淀川の旧河道が存在したとされている。また、丘陵各地には大小の開析谷が形成されており、その開析谷を利用した溜池が各地に点在する。一方で丘陵南端部には比較的平坦な面が広がっており、そこには現在閑静な住宅街が広がっている。本遺跡は、この平坦面の中央にあたる南向きの緩斜面上に立地する。

第2節 歴史的環境

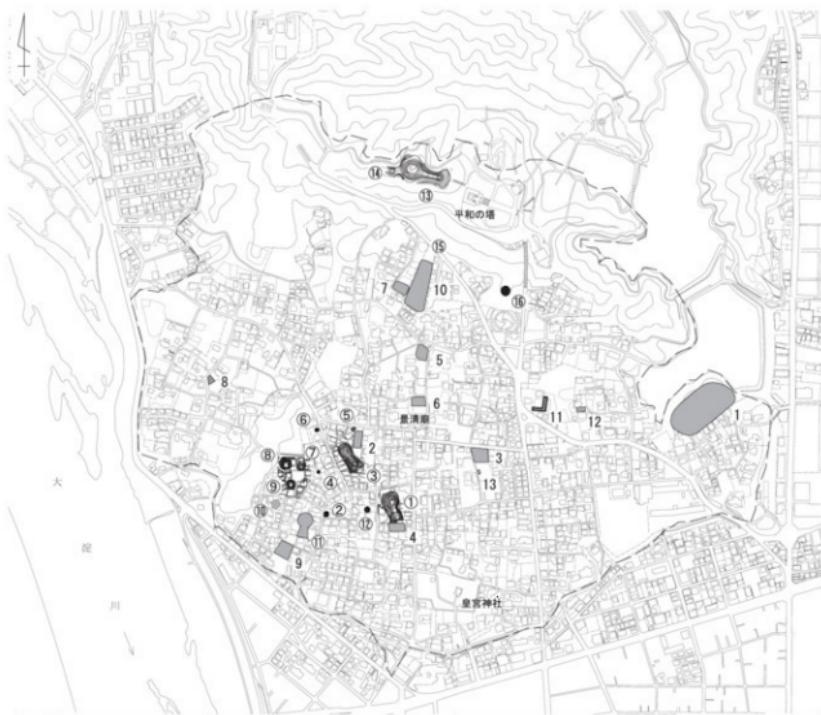
下北方丘陵南端部は、周知の埋蔵文化財包蔵地「下北方遺跡群」の範囲となっている。この地区は宮崎市の中でも遺跡の密度が高い地区として知られており、宅地開発や個人住宅建築等の開発事業に伴う確認調査、本発掘調査が頻繁に実施されている。また、下北方遺跡群の範囲内には県指定史跡「宮崎市下北方古墳」が所在する。

下北方遺跡群は旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。旧石器時代から縄文時代にかけては、下郷遺跡で剥片尖頭器や角錐状石器を主体とした石器群や、縄文時代早期の押型文土器、塞ノ神式土器、縄文時代中期の阿高式系土器等が出土している。また、塚原第3遺跡でも塞ノ神式土器や剥片の出土がみられる。下北方遺跡群ではローム層以下の調査事例が少ないため縄文時代早期以前の遺構、遺物の検出事例が少ないが、花切第2遺跡では旧石器時代の石器集中部が検出されている他、平成26年度に本発掘調査が実施された下郷第6遺跡でも旧石器時代の石器集中部が検出されていることから、地点によっては遺構、遺物が良好に残存していることが明らかになりつつある。また、下北方丘陵の北部に位置する垂水台地上では、垂水第1・第2遺跡や金剛寺原第1・第2遺跡等の旧石器時代から縄文時代の遺跡が多数所在している。地形的に連続性を持つことから、下北方遺跡群との関連性が注目される。

弥生時代には、丘陵東端に環濠集落である下郷遺跡が営まれ、弥生時代前期末～終末期にかけて断続的に集落が形成されることが明らかとなっている。下郷遺跡は、下北方丘陵東端部に突出する独立丘陵状の部分に位置し、その丘陵を囲むように二重の環濠を廻らせている。ただし、この二重の環濠は同時期のものとは考えられていない。環濠内側は削平のため遺構がほとんど残存していないが、環濠内や貯蔵穴内からは多数の遺物が検出されている。環濠内には前期末～終末期の遺物がみられるが、特に後期中葉以降の遺物が多数認められる。遺物の中で注目されるのは宮崎市の指定有形文化財となっている、貯蔵穴から出土した完形の絵画土器であり、壺の胴側面全体に具象的な線刻が施された特徴的なものである。また、同時期の遺跡として、下郷遺跡の東側谷部に中期中葉の土器が出土した宮崎大学茶園遺跡が、さらにその東側沖積地には、貯蔵穴や溝状遺構、旧河道と共に木製農耕具や筌が出土した垣下遺跡が所在する。



第1図 周辺遺跡



番号	本調査地点名	所在地	主な時代	番号	古墳名	所在地	主な時代
1	下郷遺跡	下北方町下郷	弥生	①	下北方1号墳	下北方町塚原	古墳
2	下北方5号墳周辺遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	②	下北方2号墳	下北方町塚原	古墳
3	下郷第4遺跡	下北方町下郷	古墳・古代	③	下北方3号墳	下北方町塚原	古墳
4	下北方1号墳周辺遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	④	下北方4号墳	下北方町塚原	古墳
5	塚原第1遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	⑤	下北方5号墳	下北方町塚原	古墳
6	塚原第2遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	⑥	下北方6号墳	下北方町塚原	古墳
7	花切第1遺跡	下北方町花切	古墳・古代	⑦	下北方7号墳	下北方町塚原	古墳
8	戸林第1遺跡	下北方町戸林	古墳・古代	⑧	下北方8号墳	下北方町塚原	古墳
9	塚原第3遺跡	下北方町塚原	古墳・近世	⑨	下北方9号墳	下北方町塚原	古墳
10	花切第2遺跡	下北方町花切	巨石器・古墳・古代	⑩	下北方10号墳	下北方町塚原	古墳
11	下郷第5遺跡	下北方町下郷	古墳・古代	⑪	下北方11号墳	下北方町塚原	古墳
12	下郷第6遺跡	下北方町下郷	巨石器・古墳・近世	⑫	下北方12号墳	下北方町塚原	古墳
13	下郷第7遺跡	下北方町下郷	古代	⑬	下北方13号墳	下北方町越ヶ追	古墳
				⑭	下北方14号墳	下北方町越ヶ追	古墳
				⑮	下北方15号墳	下北方町花切	古墳
				⑯	下北方16号墳	下北方町高下	古墳

※図中の点線が下北方遺跡群の範囲を示す。

第2図 下北方遺跡群 (S=1/10000)

これらは弥生時代の集落と生産域の様相を考える上で貴重な事例といえる。

古墳時代には、下北方遺跡群の南西部、塚原地区を中心に下北方古墳が形成される。下北方古墳は中期中葉から築造が開始された古墳群で、大淀川下流域の有力な首長系譜墓の一つとされている。現宮崎神宮境内に所在する船塚古墳を含めた前方後円墳5基、円墳12基が指定を受けている他、地下式横穴墓が25基、土坑墓が1基確認されている。高塚墳については調査事例が少ないが、地下式横穴墓からは宮崎平野部における地下式横穴墓の様相を考える上で貴重な遺物が多数検出されている。特に下北方9号墳に造られた5号地下式横穴墓からは、金製垂飾付耳飾、鉄製甲冑、馬具、石製・ガラス製玉類といった豊富な副葬品が出土しており、地下式横穴墓の被葬者像を考える上で貴重な資料といえる。下北方古墳では古墳時代後期の13号墳と船塚古墳を最後に古墳の築造を停止するが、その後は瓜生野村古墳や池内横穴墓といった横穴墓が丘陵斜面に形成されている。集落の調査では、下郷第4遺跡や塚原第2遺跡で古墳時代後期の建物址が確認されているが、面的な広がりについては不明瞭な部分が多い。

古代に入ると、花切第2遺跡で8世紀後半～9世紀初頭の堅穴建物群が多数検出されている。また、塚原第2遺跡では9世紀後半の寺院と考えられる建物が検出されるとともに、素弁八葉蓮華文軒丸瓦や灯明皿といった多数の遺物が検出されている他、下郷第4遺跡で堅穴建物や掘立柱建物と共にコップ形の須恵器が出土している。10世紀代の資料は少ないが、花切第2遺跡で10世紀後半の黒色土器碗を副葬した周溝墓が1基検出されている。このように、下北方遺跡群では古代の遺構、遺物が多く検出されており、それらの中には寺院（あるいは役所）のような建物も含まれていることから、この地区が古代宮崎郡の政治的、生産的な拠点であった可能性が高いといえよう。

下北方遺跡群における中世の様相は不明瞭であるが、丘陵北側には伊東氏と島津氏の抗争の舞台となった宮崎城が所在する。宮崎城は南部九州に特徴的な館屋敷式山城と呼ばれる構造をもつ。『日向記』や『土持文書』にみられる建武3年（1336）の記載が文献上の初見で、伊東氏と島津氏の抗争の舞台となった後は江戸時代の一国一城令で廃城となっている。また、島津氏時代に城主を務めていた上井覚兼が残した『上井覚兼日記』は、詳細な記述内容から史料的価値の高い文献となっている。

近世の下北方地区は延岡藩の飛び地となっており、代官所が現在の大宮中学校付近に所在したといわれている。下北方遺跡群では、塚原第3遺跡で近世の土坑墓が検出されている等、近世の遺構、遺物の検出事例は少なくない。また、下北方遺跡群の各所で近世段階の土地改変と考えられる削平や埋め立てが確認されている。これらのことから、この地区には代官所を中心とした屋敷地が広がっていた可能性が考えられる。

このように、下北方地区で確認されている各時代の遺構、遺物の様相から、この地区が古くから宮崎平野部の中心的な場所の一つであったことがうかがえる。今後の調査の進展によって、下北方地区の歴史的重要性がさらに明らかになっていくことが期待される。

第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成25年9月30日、共同住宅建築に伴い民間事業者より下北方町下郷6083における埋蔵文化財の有無について、本市教育委員会文化財課宛てに照会がなされた。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「下北方遺跡群」の範囲に含まれることから、平成25年10月24日～平成25年10月25日にかけて事前の確認調査を実施した。確認調査の結果、事業地内にはアカホヤ火山灰層上位で遺物包含層及び遺構、遺物が良好に残存していることが明らかとなった。この結果を受けて、文化財課と民間事業者との間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を重ねた結果、将来的に市道に編入される予定の道路部分361mについて、記録保存を目的とした本発掘調査を実施するに至った。

第2節 確認調査成果の概要

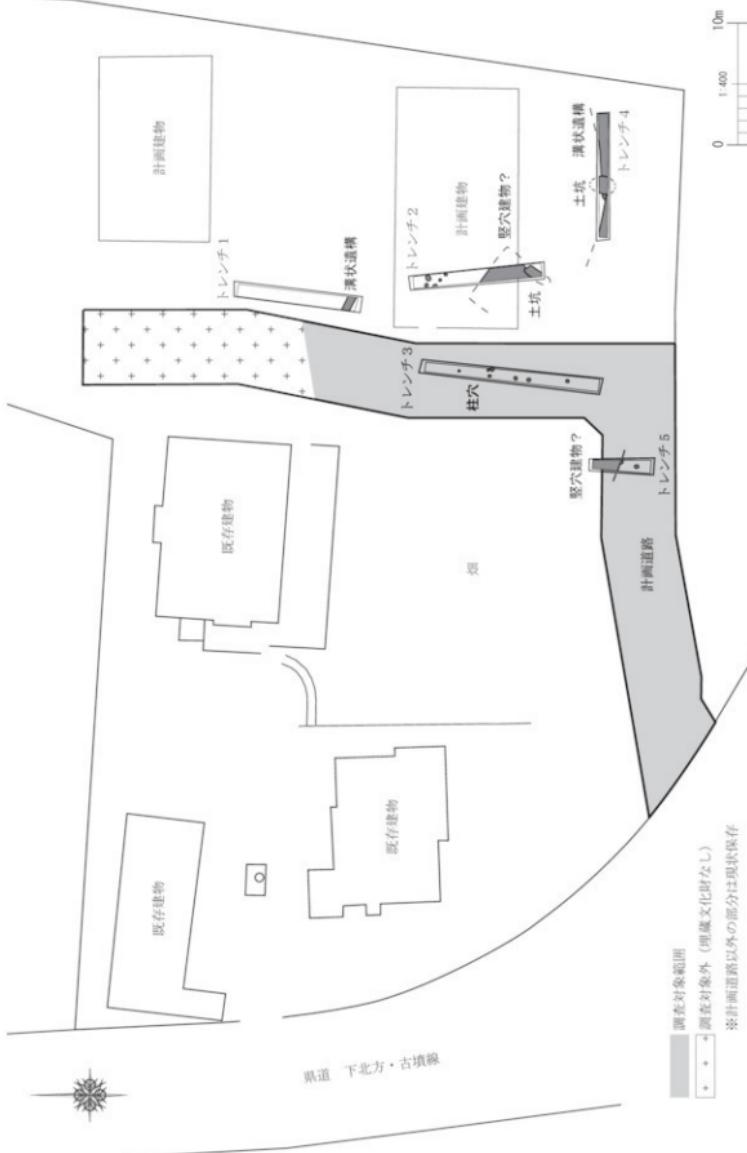
確認調査では、計画地内に5本のトレンチを設定して掘削を実施した（第3図）。トレンチ1北半では、表土直下においてにぶい黄褐色のローム層（X層）が検出された。南半では同レベルにおいてアカホヤ火山灰層（VI層）が検出されていることから、旧地形はトレンチ1中ほどから北に向かって高くなる地形であったことが確認された。トレンチ2からトレンチ5では、アカホヤ火山灰層上面において遺構検出をおこなった結果、全てのトレンチで遺構が確認された。確認された遺構は、トレンチ1で溝状遺構、トレンチ2で土坑、竪穴建物跡、トレンチ3で柱穴、トレンチ4で土坑、柱穴、トレンチ5で溝状遺構、土坑である。トレンチ2の竪穴建物からは、口縁部が変形した、強く被熱した高坏と、坏部内面にハケメを残す高坏が出土した。また、トレンチ4からは7世紀代と思われる土師器壺、坏、須恵器坏蓋が出土した。また、トレンチ5の竪穴建物は本報告書の竪穴建物8に対応する遺構である。なお、計画地における埋蔵文化財の取扱いの詳細は第3図の通りである。

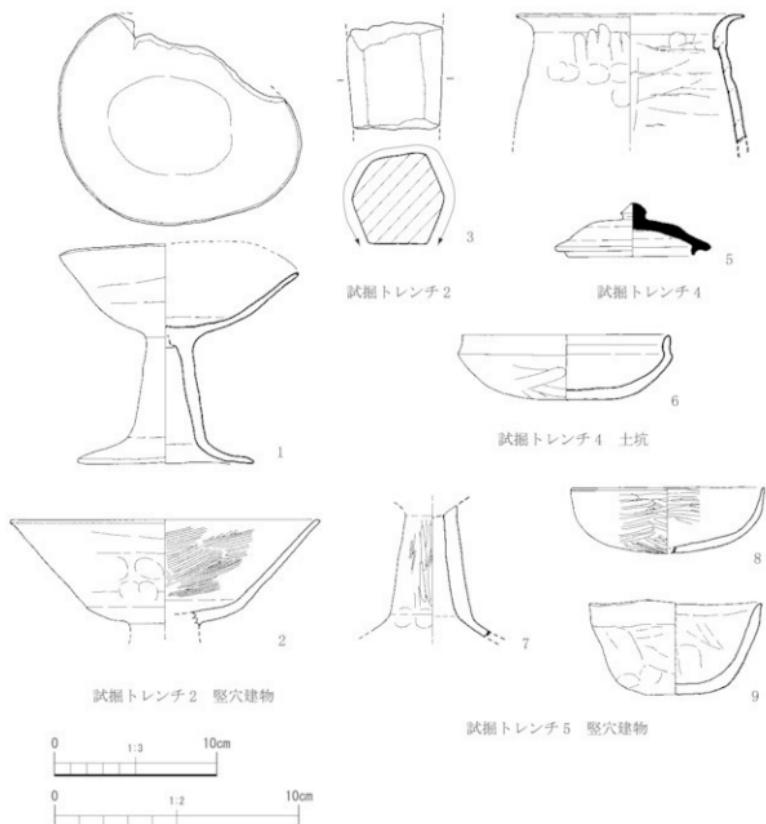
第3節 調査の経過

本発掘調査は、平成26年2月3日～平成26年3月20日に実施した。調査はまず重機により表土と遺物包含層（Ⅱ～V層）を除去し、アカホヤ火山灰層（VI層）上面で遺構検出を試み、その後人力による遺構掘削を記録作業と併行して行なった。また、VI層上面での遺構掘削と併行して、縄文時代早期ローム層（VII～X層）のトレンチ調査を実施した。空中写真撮影は平成26年3月12日に実施し、その後重機による埋め戻しと調査機材の撤収作業を行ない、調査を終了した。電柱移設の遅れにより県道との接続部分を工事立会いで対応したため、本発掘調査の総面積は256.5m²となった。発掘調査の延べ日数は25日である。

整理作業は宮崎市清武埋蔵文化財センターで行ない、水洗い、注記、接合作業を平成27年2月1日～平成27年3月27日に、実測、トレース作業を平成27年5月11日～平成27年8月31日の期間で実施した。

第3図 調査区位置図 ($S=1/400$)



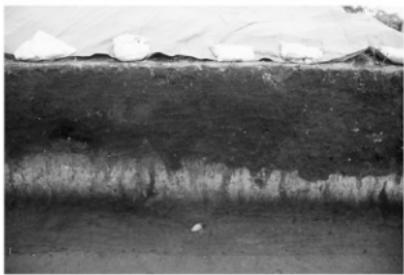
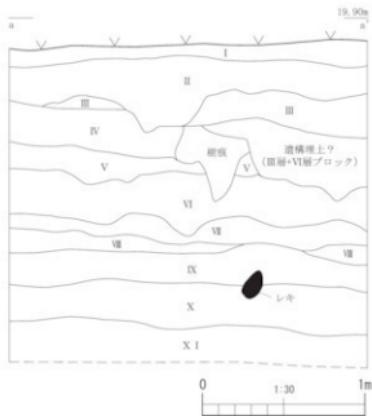


第4図 確認調査出土遺物実測図 (S=1/3・1/2)

第Ⅲ章 調査の成果

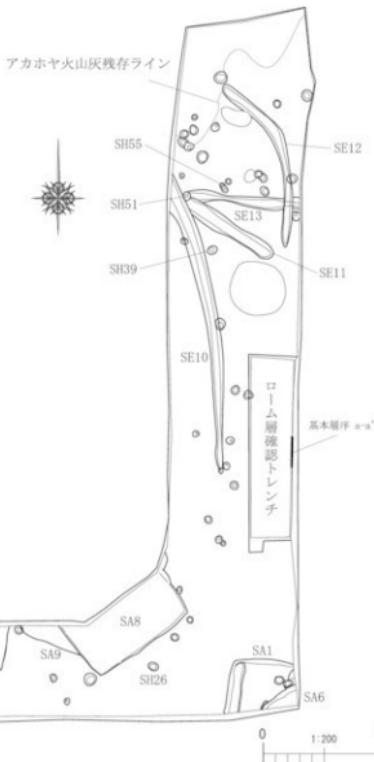
第1節 調査成果の概要

調査区の現況は平坦な畠地であった。表土と遺物包含層を重機で除去し、アカホヤ火山灰層（VI層）上面で構造検出を行なったところ、古代の堅穴建物、土坑、溝状遺構、中世の土坑が確認された。また、調査区東側に設定したトレンチ1でアカホヤ火山灰層下ローム層（Ⅶ～X層）の掘削を実施したところ、にぶい黄褐色ローム層（IX層）下位から頁岩製剝片1点が出土した。調査期間と安全面の問題から、霧島小林降下鉄石（XI層）より下位の掘削は実施していない。出土遺物はコンテナ8箱分である。

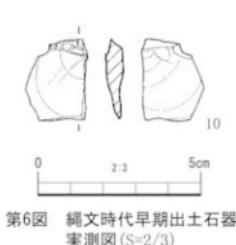


写真図版 基本層序

- 土層注記
- I 暗褐色 (10YR3/3)。粘性やや弱、しまり強い。
表土。
 - II 黒褐色 (10YR2/2)。粘性、しまりあり。シルト。
橙色、白色の軽石粒を多く、微細な土師器片、炭化物を含む。
 - III 黒色 (10YR1.7/1)。粘性、しまりあり。シルト。
橙色、白色の軽石粒を多く含む。
 - IV 黒色 (10YR1.7/1)。粘性、しまりあり。シルト。
ガラス質の微細な氈物を多く含む。黒ボク土。
 - V 黒色 (10YR2/2)。粘性やや弱、しまりあり。シルト。
アカホヤ火山灰 (VI層) の2次堆積層。
 - VI 橙色 (7.5YR5/8)。アカホヤ火山灰層。
 - VII 黒褐色 (10YR2/2)。粘性あり、しまり強い。ローム。
アカホヤ火山灰の1次堆積軽石を多く含む。
 - VIII 黒色 (10YR1.7/1)。粘性、しまり強い。ローム。
黄色、白色の微細な軽石粒を多く含む。
 - IX 黒褐色 (10YR3/2)。粘性、しまり強い。ローム。
白色の微細な軽石粒を含む。
 - X にぶい黄褐色 (10YR4/3)。粘性、しまり強い。
ローム。橙色、白色の微細な軽石粒をわずかに含む。
 - XI にぶい黄褐色 (10YR4/3)。粘性、しまり強い。
ローム。霧島小林隣下軽石を含む。



第5図 基本層序実測図 (S=1/30)・遺構配置図 (S=1/200)



第6図 縄文時代早期出土石器 実測図 (S=2/3)

第2節 基本層序（第5図）

鍵層となる火山噴出物はアカホヤ火山灰（7300年前、V～VII層）と霧島小林降下軽石（16700年前、XI層中に含まれる）が確認された。遺物包含層はII～V層、及びIX層であり、その内のIV～V層はいわゆる黒ボク土に相当する。計画地は概ね北から南に向けて下る傾斜面となっており、南側の方が遺物包含層の堆積が厚い。また、調査区北側（既存建物東側付近）ではアカホヤ火山灰層（VI層）が削平により消失している。

第3節 縄文時代早期の遺物（第6図）

VII～X層のトレンチ調査を実施した結果、IX層下位～X層上位にかけて、自然疊数点と頁岩製剥片1点が出土した。なお、掘削と併行して遺構検出を試みたが、遺構は確認できなかった。

剥片（頁岩） トレンチ1のIX層中から出土した。中央部で縦方向に折れているが、本来は横長の剥片であると考えられる。

第4節 古代の遺構と遺物

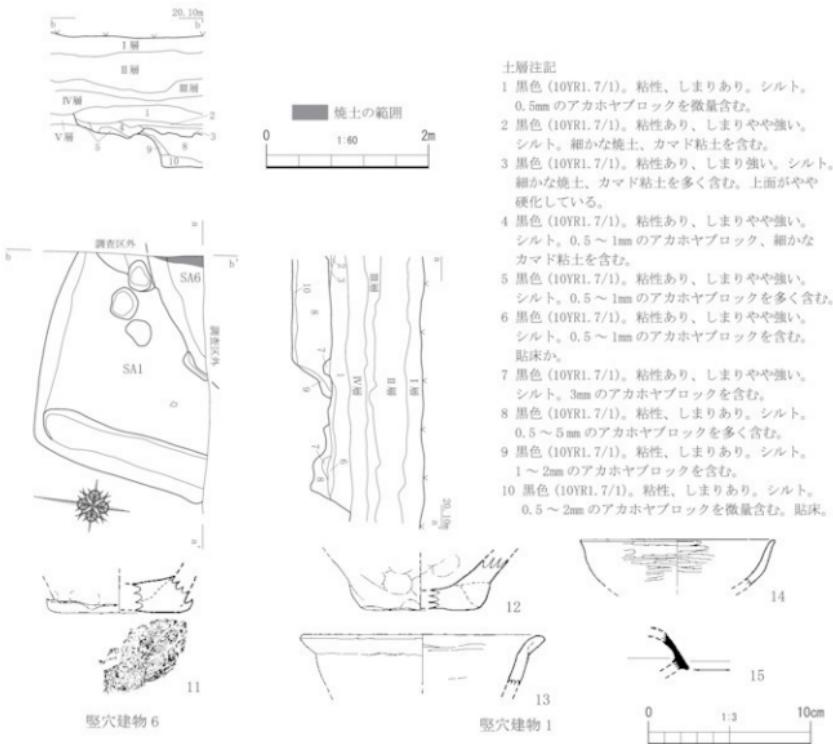
第1項 壓穴建物

竪穴建物6（第7図） 調査区東南部で検出された。竪穴建物1に上部を削平されている。北西隅の一部のみが検出されたため平面形は不明であるが、隅丸方形の可能性が考えられる。地山ブロックを含む黒色土で薄い貼床を形成している。遺物は埋土中から少量出土し、いずれも小破片であった。11は土師器甕の底部である。厚手の平底で、外底面に木葉痕が認められる。

竪穴建物1（第7図） 調査区東南部で検出された。竪穴建物6に後出して造られている。北西隅の一部のみが検出されたが、平面形は隅丸方形とみられる。地山ブロックを含む黒色土で薄い貼床を形成しているが、建物の西側だけにしか確認できない。また、建物の西辺部にのみ壁帶溝が掘り込まれている。掘り方面で柱穴を2基検出したが、住居に伴うものかは確認できなかった。東側の調査区壁面付近には、焼土とカマド構築材と思われる粘土片を含む黒色土が広がっており、カマドを伴う建物の可能性が考えられる。遺物は貼床面で土師器片が1点出土した他、埋土中から少量出土した。12は土師器甕である。厚手の平底を呈する。13は土師器鉢である。口縁部がく字に外反する。14は土師器壺である。胴部外面にわずかに稜線をもち、口縁部が外反する。15は須恵器壺蓋である。

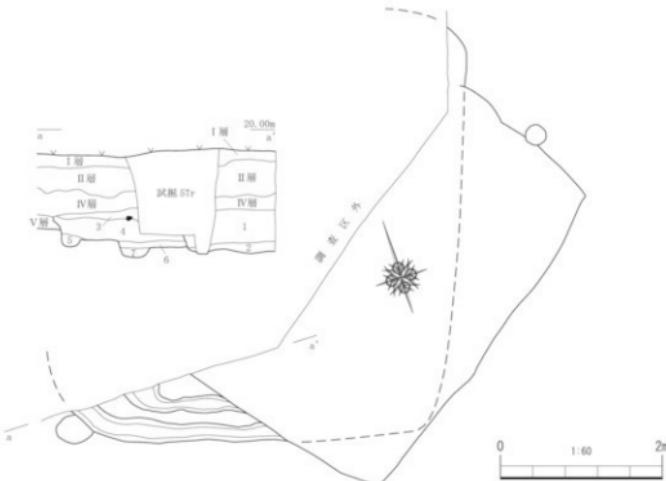
竪穴建物9（第8図） 調査区西側で検出された。竪穴建物8に上部を削平されている他、調査区外に広がっているため全体の様相は不明瞭である。地山ブロックを含む黒色土で薄い貼床を形成している。掘り方面で、壁に沿う形で溝が二条掘り込まれている。内側の溝は貼床形成前に、外側の溝は貼床面に掘り込まれていることから、用途が異なる可能性がある。遺物は埋土中から土師器の小破片が少量出土したが、図化に耐えうるものはなかった。

竪穴建物8（第9図） 竪穴建物9に後出して造られている。検出したのは建物の東側半分程度であるが、平面は方形を呈すると考えられる。地山ブロックを含む黒色土で薄い貼床を形成し



第7図 堅穴建物1・6実測図(S=1/60)、出土遺物実測図(S=1/3)

ており、建物北側にはカマドが構築されている。また、建物南側に礫と敲石（46～48）を充填した柱穴が1基検出された。遺物は埋土中（16～18）と床面（19～45）、貼床層中（37～39）、柱穴（46～49）から出土している。19～27は土師器壺である。24と27は底部に木葉痕が認められる。28～29は土師器壺である。28は胴部側面下部に穿孔が認められる。30～33は土師器壺である。31～33は外面にミガキが施される。34は土師器小型丸底鉢である。器壁が薄く、外面下部はケズリ調整が施される。古墳時代のものが混入したものと考えられる。35は須恵器壺の胴部片である。外面に「×」の線刻が認められる。36は須恵器壺である。断面方形の低い高台を有する。貼床層中出土の37～38は古墳時代前期の土師器壺、壺である。40～45は床面出土の敲石である。いずれも砂岩製で、重量135.4g～1600gと大きさにばらつきがある。46～49は柱穴出土の敲石である。いずれも砂岩製で、特に49は重量8500gと大型である。47と49は一部に擦痕が認められることから、砥石としても用いられたと考えられる。



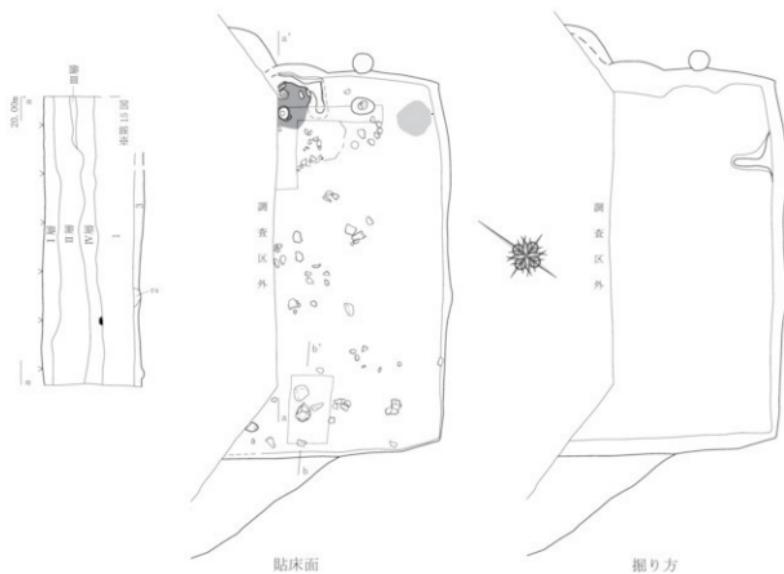
土層注記

- 1 黒 (10YRL 7/1)。粘性、しまりあり。シルト。1～3cmのアカホヤブロックを含む。
- 2 黒 (10YRL 7/1)。粘性あり、しまり強い。シルト。0.5～3cmのアカホヤブロックを含む。貼床。
- 3 黒 (10YRL 7/1)。粘性、しまりあり。シルト。1cmのアカホヤブロックを少數含む。
- 4 黒 (10YR2/1)。粘性、しまりあり。シルト。0.5～5cmのアカホヤブロックを含む。ややざらざらした質感。
- 5 黒 (10YRL 7/1)。粘性あり、しまりや弱い。シルト。1～3cmのアカホヤブロックを含む。
- 6 黒 (10YRL 7/1)。粘性、しまりやや強い。シルト。1cmのアカホヤブロックを多く含む。貼床。
- 7 黒 (10YRL 7/1)。粘性あり、しまりやや弱い。シルト。0.5～1cmのアカホヤブロックを含む。

第8図 積穴建物9実測図 (S=1/60)

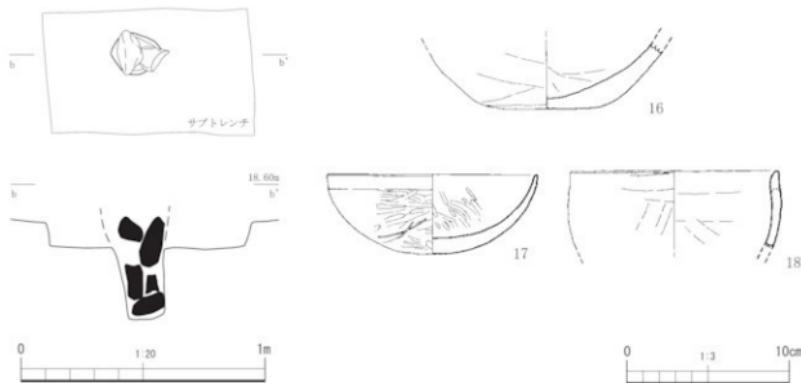
カマドは建物北辺のはば中央に位置する。調査は①カマド廃棄後の粘土塊の検出→②サブトレレンチによる土層の確認→③崩落土を除去し機能面を検出→④掘り方の検出の順序で実施した。①の際、カマド粘土の塊の直上で黒色土器の壺(50)が確認された。カマド廃棄後に置かれた可能性が考えられる。カマド本体は、0.57m×0.42m以上を測り、壁面と天井部は明黄色粘土で構築され、焼成面と内壁は赤く変色し、硬化している。また、カマド内に土師器壺(61)を設置して支脚としている。カマド本体を検出していくと、廃棄時に天井部が破壊されていることが判明した。また、天井部を破壊した際の粘土がカマド内部と前庭部に堆積しているが、その中から土師器高壺や壺が破片で出土した。特に大型高壺(60)は、カマド内に落ち込んだ脚部と、前庭部のカマド粘土下から出土した壺部の破片が接合していることから、カマドを破壊するに伴って大型高壺が破壊された可能性がある。こうした状況は、カマド廃棄に伴う祭祀行為によるものと推測される。また、崩落したカマド粘土を取り除くと、前庭部に硬化面が検出された。カマド掘り方は建物貼床に掘り込まれており、貼床形成後にカマドが構築されたと考えられる。また、崩落したカマド粘土を除去したところで、貼床面に高壺(62)を埋め込んだとみられる小土坑(柱穴?)が1基検出された。カマド廃棄に伴う祭祀行為の可能性がある。

カマド周辺からは土師器の壺、高壺、壺が出土した。50はカマド粘土上に置かれたとみられる黒色土器壺である。51～60はカマド崩落土中から出土した土師器である。51の小型壺あるいは壺とみられる口縁部破片以外は高壺、壺が主体であり、建物床面出土遺物とは明らかに組成

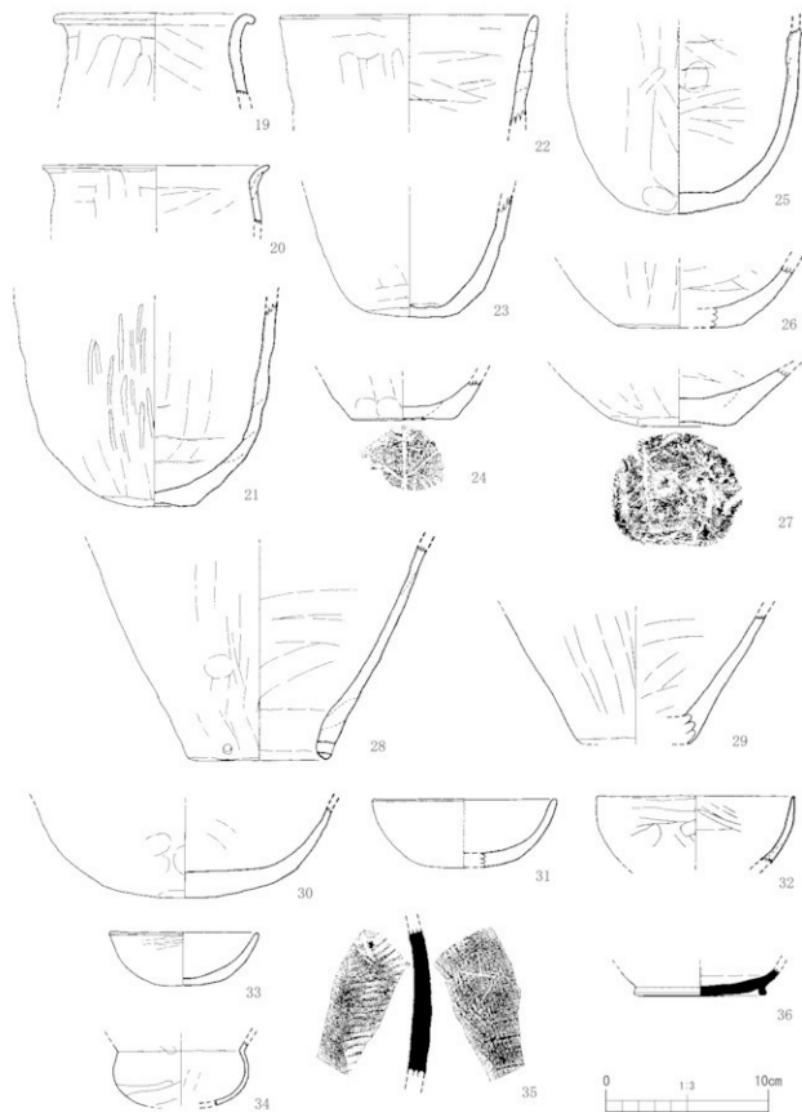


土層注記

- 1 黒 (10YR1.7/1)。粘性、しまりあり。シルト。1~3cmのアカホヤブロックを含む。
- 2 黒 (10YR1.7/1)。粘性あり、しまりやや弱い。シルト。焼土を含む。
- 3 黒 (10YR1.7/1)。粘性あり、しまり強い。シルト。0.5~3cmのアカホヤブロックを含む。貼床。



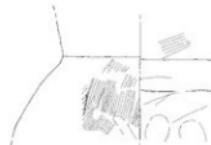
第9図 竪穴建物8実測図 (S=1/60)、出土遺物実測図① (S=1/3)



第10図 堅穴建物8出土遺物実測図②(S=1/3)



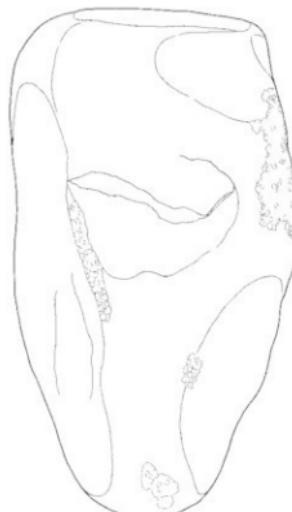
37



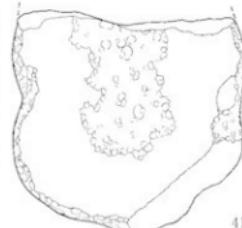
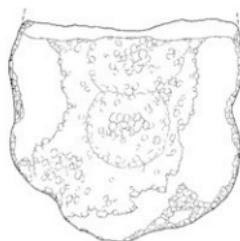
38



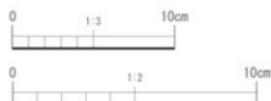
39



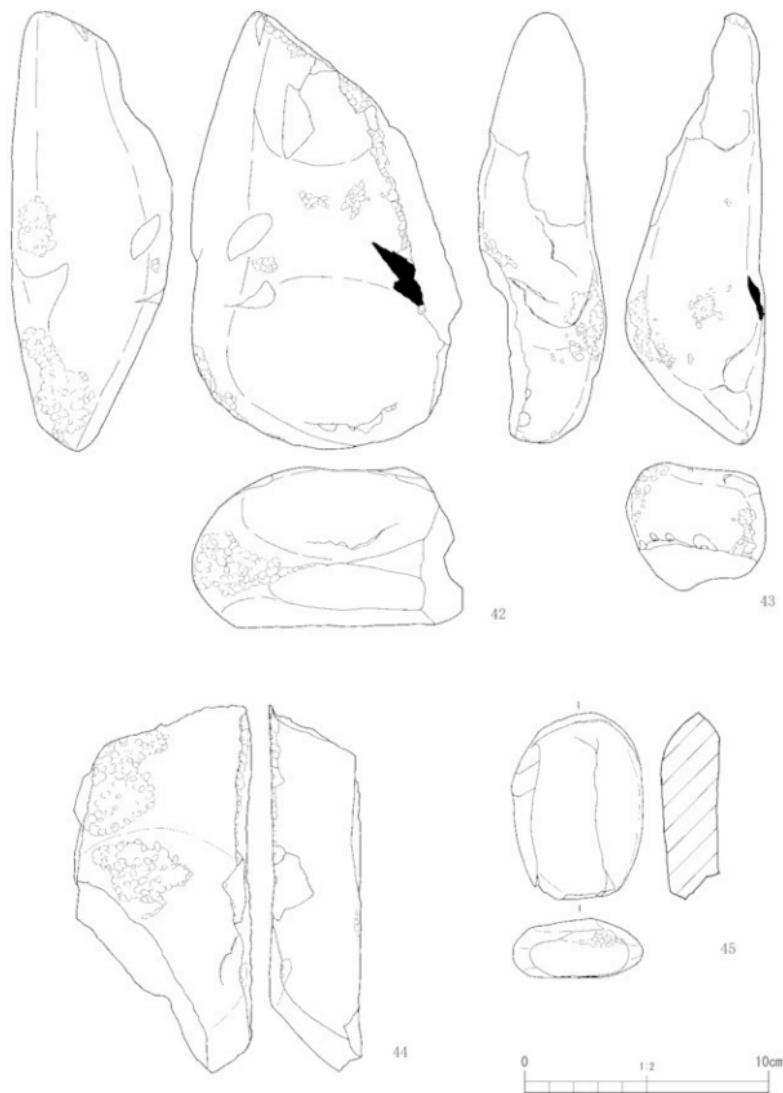
40



41

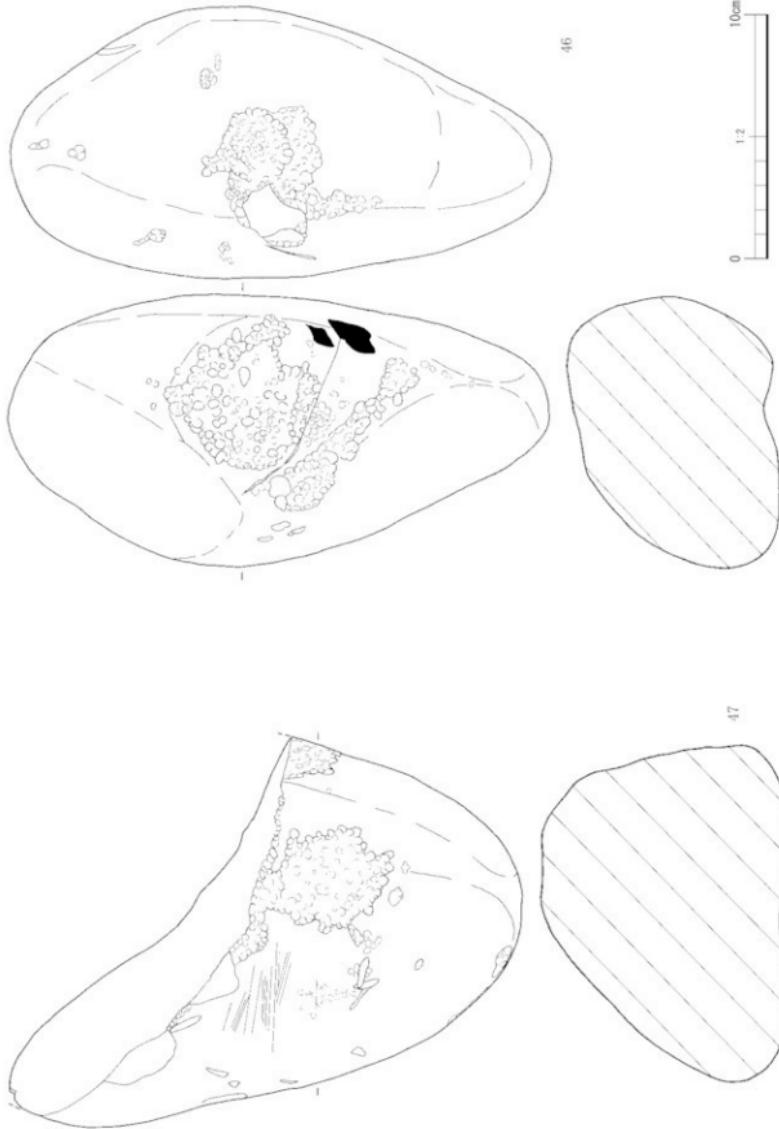


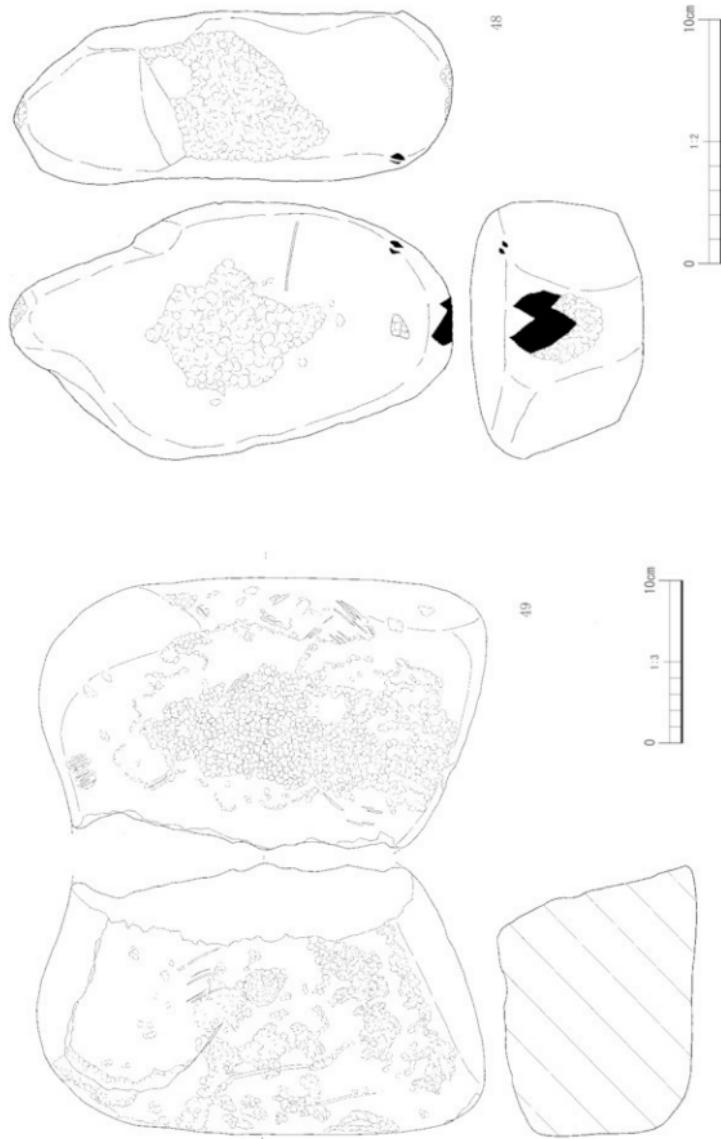
第11図 竪穴建物8出土遺物実測図③(S=1/3・1/2)



第12図 堅穴建物8出土遺物実測図④(S=1/2)

第13図 竪穴建物8出土遺物実測図⑤(S=1/2)

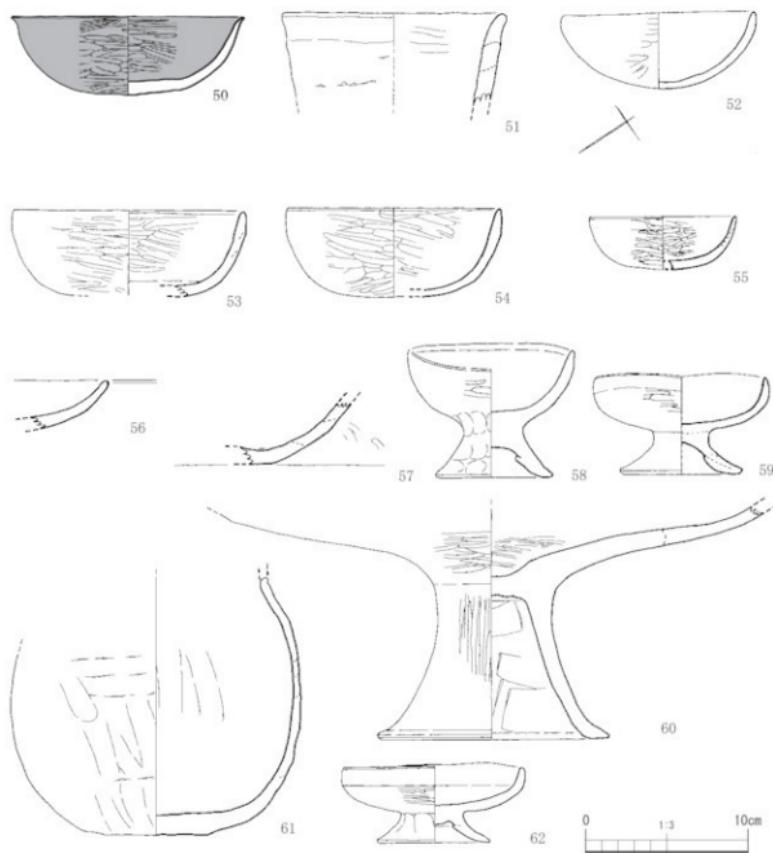




第14図 積穴建物6出土遺物実測図⑤(S-1/3・1/2)

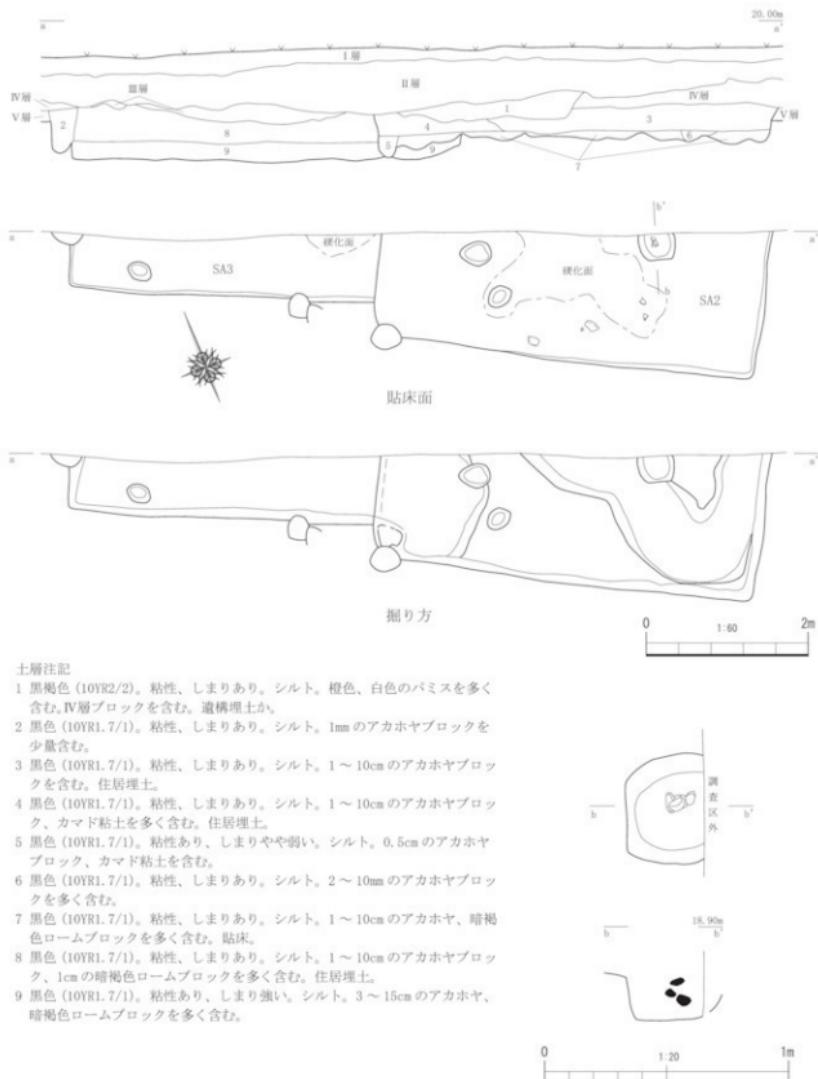


第15図 竪穴建物8カマド実測図 (S=1/30)

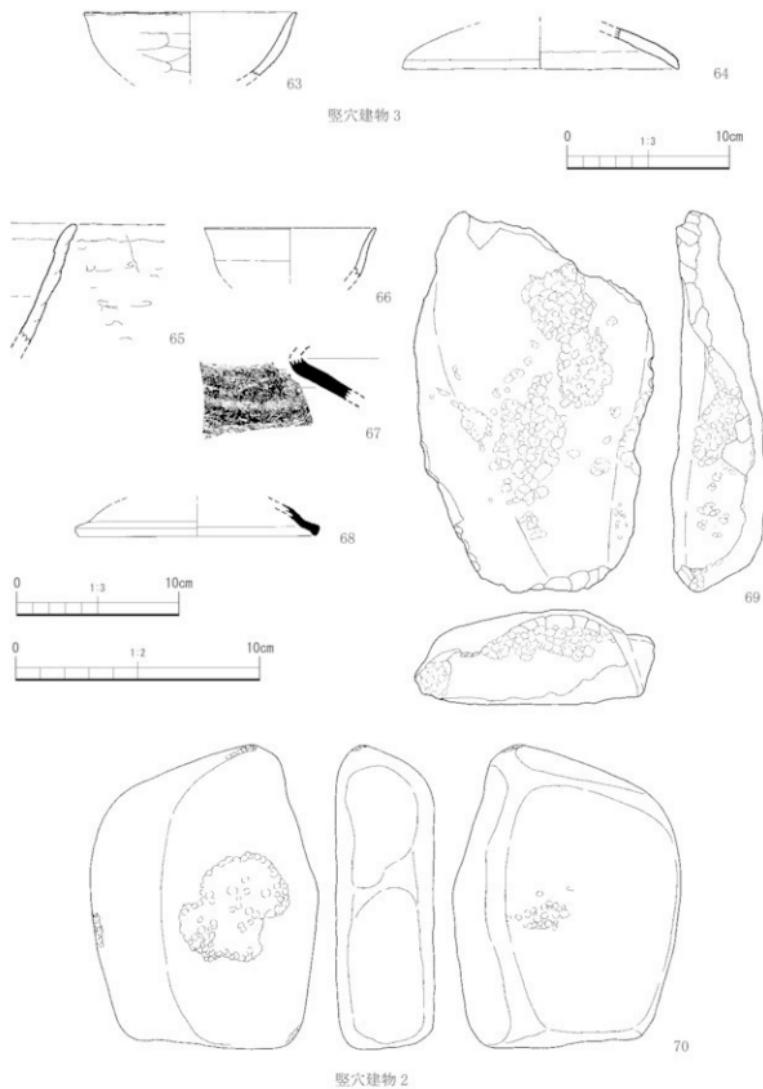
第16図 壇穴建物8カマド出土遺物実測図 ($S=1/3$)

が異なるのが特徴的といえる。61はカマドに設置された壺である。平底で球形胴を呈し、頸部に向かってすぼまる、やや下膨れ状の器形を呈する。上部が強く被熱している。62はカマド横の小土坑から出土した高壺である。

壇穴建物3(第17図) 調査区南側で検出された。東側を壇穴建物2によって削平されている。南側の一部を検出したのみだが、平面形は方形と考えられる。地山ブロックを含む黒色土で貼床を形成しており、東側の一部に硬化面が認められる。掘り方面で柱穴を1基検出したが、建物に伴うものは確認できなかった。遺物は埋土中から少量出土している。63は土師器壺である。外面は横位のケズリ調整が施され、口縁部はヨコナデで仕上げている。64は土師器壺蓋である。



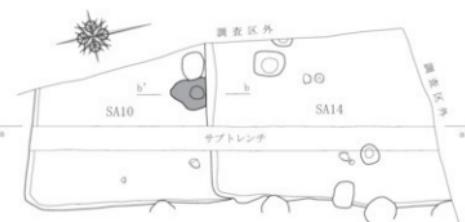
第17図 積穴建物2・3実測図(S=1/60)、柱穴遺物出土状況実測図(S=1/20)



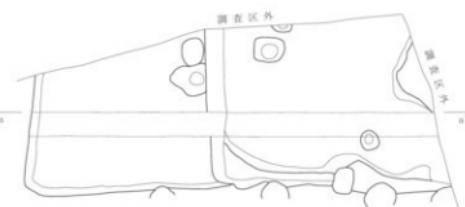
第18図 壺穴建物2・3出土遺物実測図 (S=1/3・1/2)

土層注記

- 1 黒褐色 (10YR1.7/2)。粘性、しまり強い。シルト。カマド粘土ブロック、微細なアカホヤ粒子を含む。SC7 埋土。
- 2 黒色 (10YR1.7/1)。粘性、しまり強い。砂混シルト、黄白色粒子 (ボラ) を含む。
- 3 黒色 (10YR2/1)。粘性、しまりあり。シルト。
- 4 黒色 (10YR1.7/1)。粘性、しまりあり。シルト。1 ~ 5mm のアカホヤブロックを含む。
- 5 黒色 (10YR1.7/1)。粘性、しまりあり。シルト。3cm のアカホヤブロックを含む。
- 6 黒褐色 (10YR2/2)。粘性、しまりあり。シルト。3 ~ 10cm のアカホヤブロック、暗褐色ロームブロックを多く含む。貼床。



貼床面



掘り方

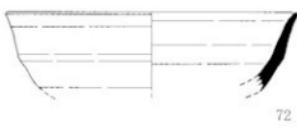


SA10 炉土層注記

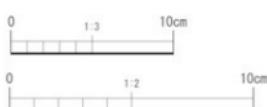
- 1 暗赤褐色 (5YR5/8)。粘性あり、しまりやや弱い。シルト。焼土ブロックを多く含む。
- 2 明赤褐色 (5Y5/8)。粘性なり、しまり強い。砂質シルト。非常に硬く縮まる焼土面。



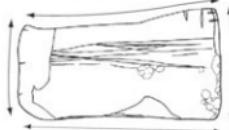
71



72

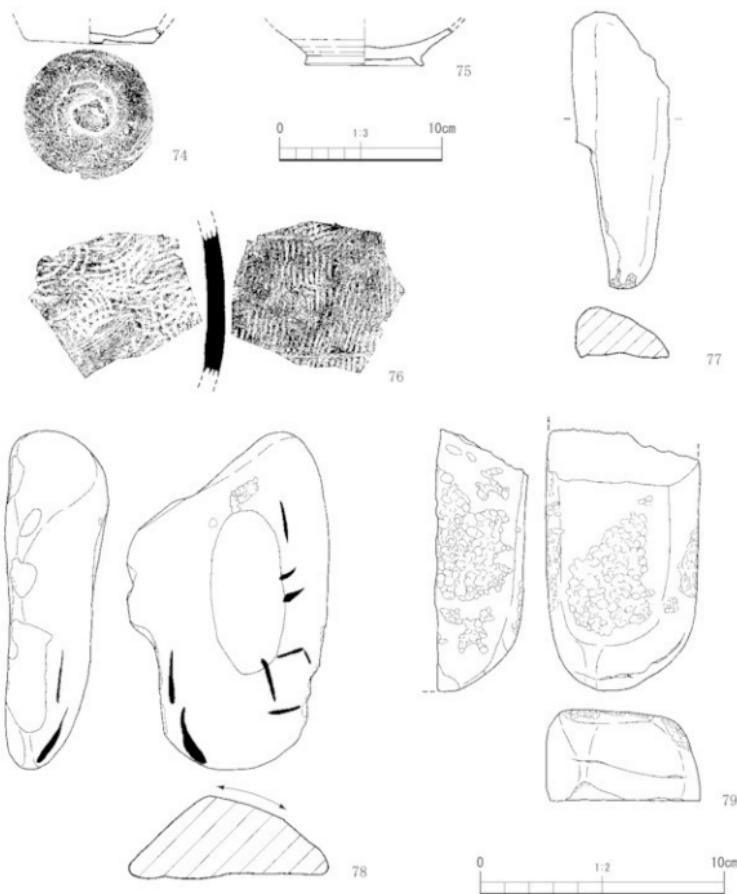


堅穴建物 10



73

第19図 竪穴建物10・14実測図 (S=1/60)、出土遺物実測図 (S=1/3・1/2)



第20図 堅穴建物14出土遺物実測図 (S=1/3 · 1/2)

ある。据部がわずかに下方に拡張する。

堅穴建物2（第17図） 調査区南側で検出された。堅穴建物3に後出して造られている。南側の一部を検出したのみだが、平面形は方形と考えられる。地山ブロックを含む黒色土で薄い貼床を形成しており、建物中央部に硬化面が認められる。床面で建物に伴うと思われる柱穴が2基検出された。その内の1基の埋土中からは、掌大の自然礫が4個出土した。意図は不明であるが、何らかの行為を表しているとみられる。遺物は埋土中と床面から少量出土している。65～

第1表 壓穴建物一覧表

掲載頁	図番号	遺構番号	規格			主軸方向	火焔	備考	年代
			長辺(m)	短辺(m)	床面積(m ²)				
p. 10	第7図	堅穴建物1	2.4	1.3	—	N-7° -E	カマド?		
p. 20	第17図	堅穴建物2	4.8	1.9	—	N-24° -E	なし		8C後～9C初?
p. 20	第17図	堅穴建物3	4.8	0.8	—	N-28° -E	なし		
p. 10	第7図	堅穴建物6	1.7	—	—	N-34° -W	なし		
p. 12	第9図	堅穴建物8	4.8	2.9	—	N-55° -E	カマド		7C中葉
p. 11	第8図	堅穴建物9	5.1	4.5	—	N-21° -E	なし		
p. 22	第19図	堅穴建物10	2.1	1.5	—	N-9° -E	地床炉		8C後半?
p. 22	第19図	堅穴建物14	3	1.9	—	N-14° -E	なし		9C前半

67、69～70は床面出土遺物である。68は埋土中と後述する土坑5内出土破片が接合したものである。土層の堆積状況から、堅穴建物2の遺物が土坑5を構築する際に混入したものと判断し、ここに掲載した。

堅穴建物10（第19図） 調査区西側で検出された。堅穴建物14により東側を削平されているが、平面形は隅丸方形を呈するとみられる。地山ブロックを含む黒色土で貼床を形成しており、建物中央部に地床炉が構築されている。炉はすり鉢状の浅い掘り込みを有し、床面は被熱により硬化している。遺物は埋土中と床面から少量出している。71は埋土中出土の須恵器壺蓋である。72は埋土中出土の須恵器壺で、堅穴建物14埋土中出土の破片と接合した。73は床面出土の砥石である。凝灰岩製で、側面が抉れるまで使い込まれている。

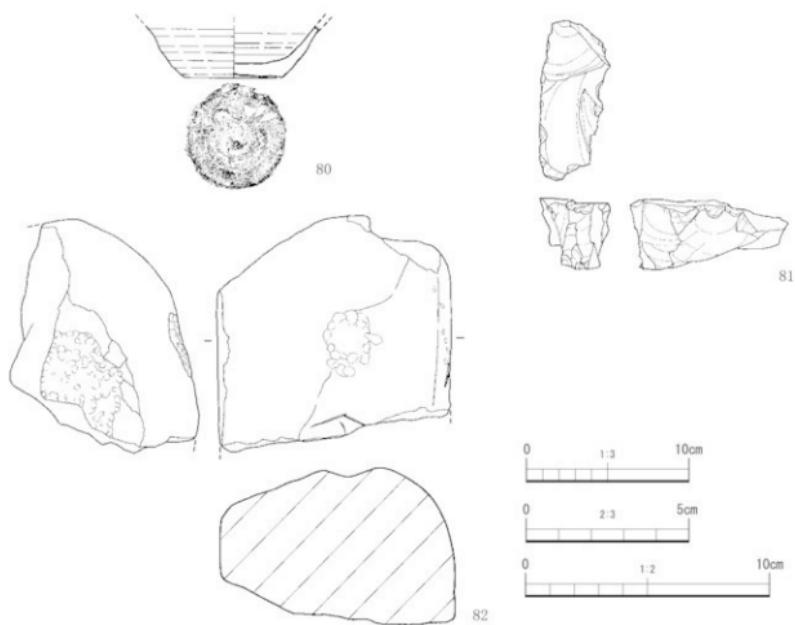
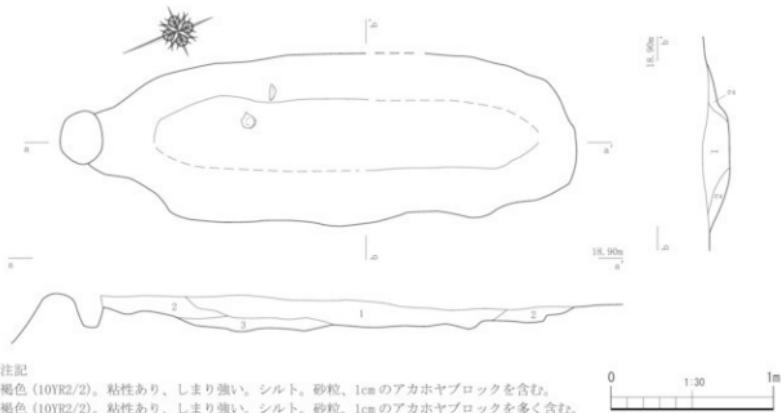
堅穴建物14（第19図） 調査区西側で検出された。堅穴建物10に後出して造られている。調査区外に広がっているが、平面形は隅丸方形を呈するとみられる。地山ブロックを含む黒色土で貼床を形成しており、貼床面で柱穴を3基検出した。遺物は埋土中と床面から少量出土している。74～75は床面出土の土師器壺である。76は埋土中出土の須恵器壺である。77～78は床面出土の砂岩製敲石である。79は被熱により赤く変色している。

第2項 土坑

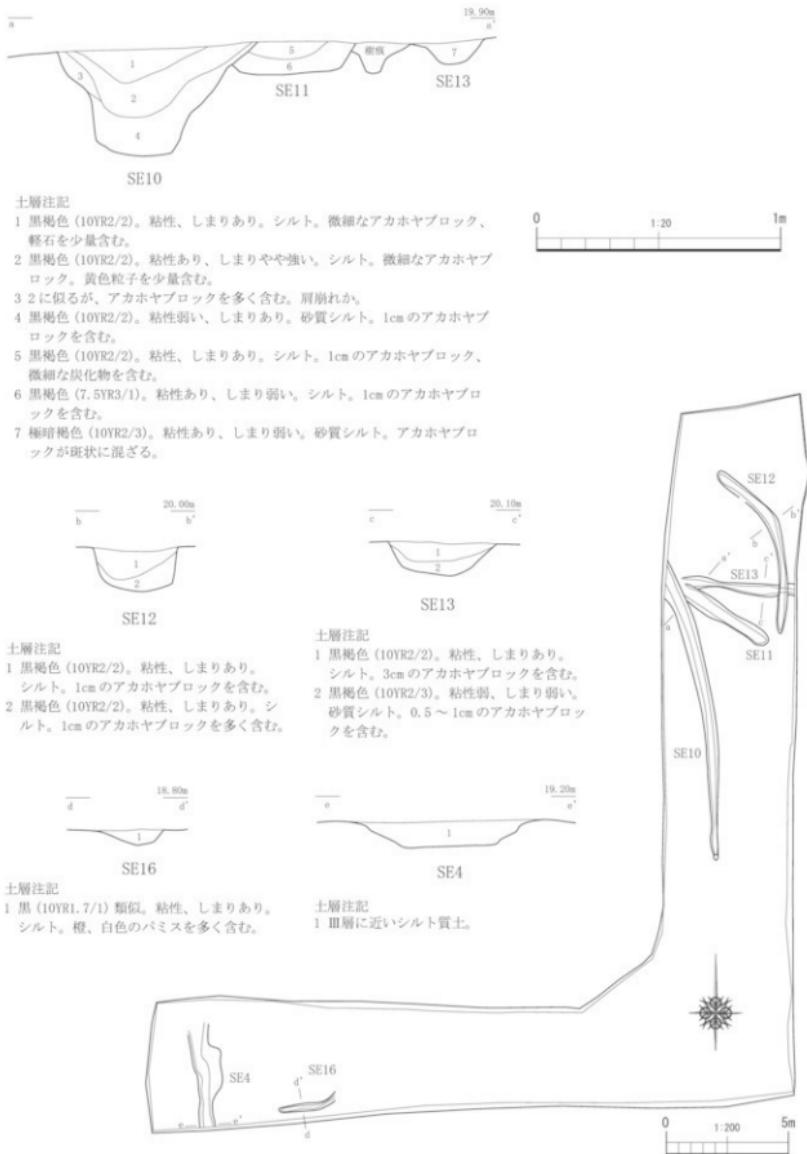
土坑15（第21図） 調査区南側で検出された。平面形は長軸3m×短軸1.06mの梢円形を呈し、断面は0.22mのすり鉢状を呈する。埋土はレンズ状に堆積しており、埋土中から遺物が少量出土した。80は土師器壺である。底部は回転ヘラ切りで成形されている。81は頁岩製石核で、細石刃石核のプランクの可能性がある。82は砂岩製敲石である。被熱により全体が赤変している。

第3項 溝状遺構（第22図）

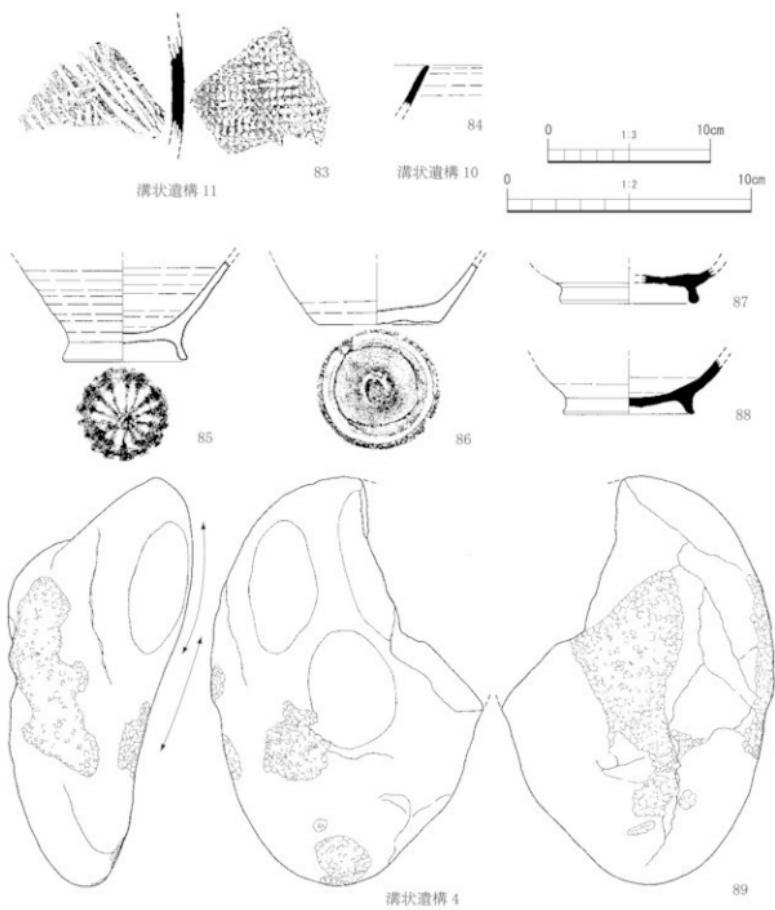
調査区内で6条の溝状遺構が検出された。埋土は黒褐色土を主体とするが、溝状遺構4のみ基本層序Ⅲ層に近い黒色土が埋土となっている。配置に企画性等はみられないが、溝状遺構10と12は並行して造られているようにも見える。遺物は溝状遺構4で多く出土したが、その他は少量であった（第23図）。85～86は溝状遺構4出土の土師器壺である。外底面に放射状調整痕が認められる。86は底部回転ヘラ切りで、外底面縁辺部にナデ状の痕跡が認められる。87～88は須恵器壺である。89は砂岩製の敲石である。



第21図 土坑15実測図 (S=1/30)、出土遺物実測図 (S=1/3・2/3・1/2)

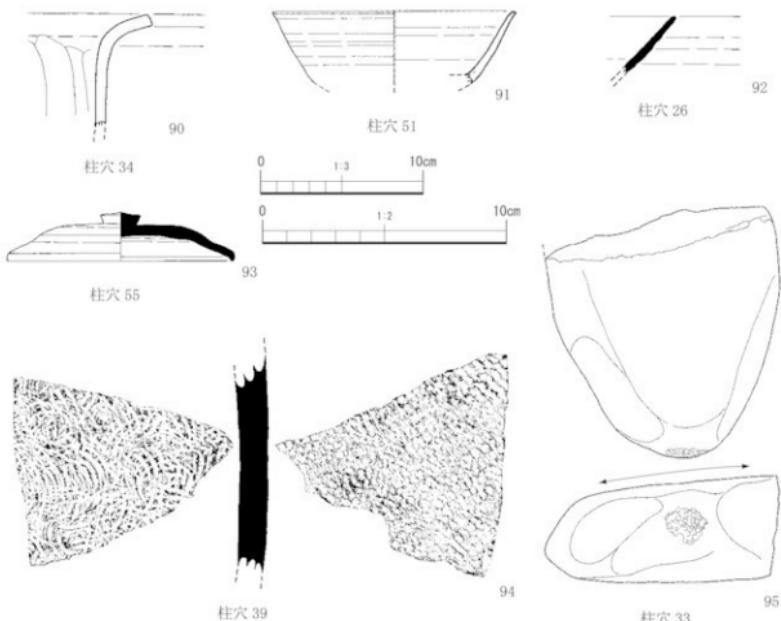


第22図 溝状構造実測図 (S=1/200)、土層実測図 (S=1/20)

第23図 溝状遺構出土遺物実測図 ($S=1/3 \cdot 1/2$)

第4項 柱穴

調査区内では約100基の柱穴が検出された。大半は遺物を含まないが、いくつかの柱穴から遺物が出土している。ここでは主なもののみを掲載した。詳細は第4表を参照されたい。



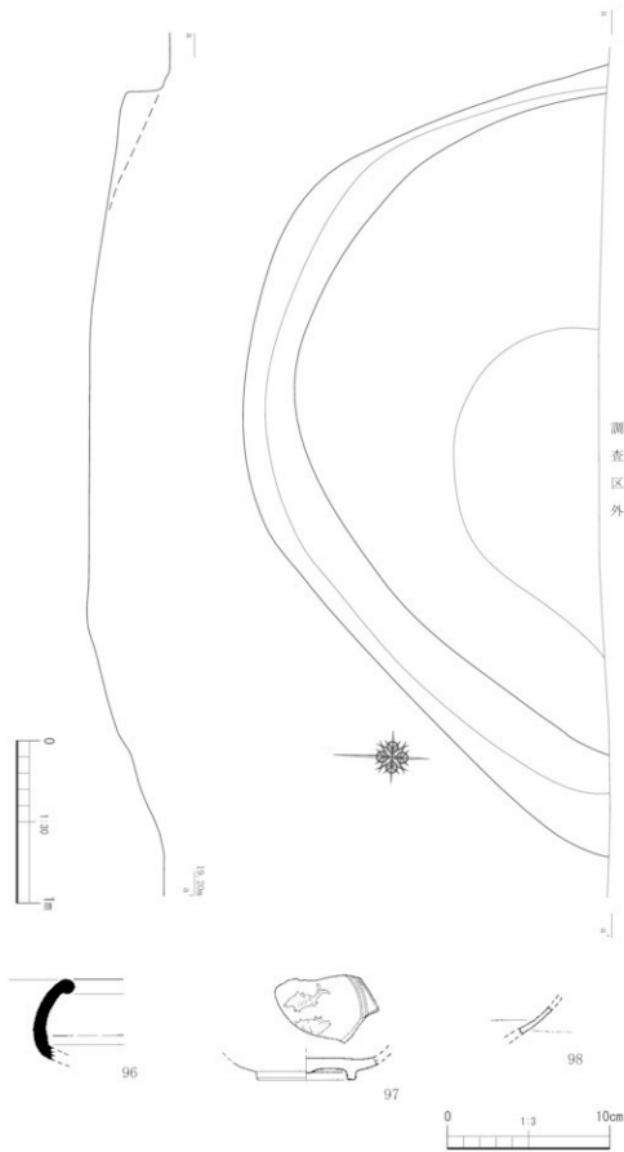
第24図 柱穴出土遺物実測図 ($S=1/3 \cdot 1/2$)

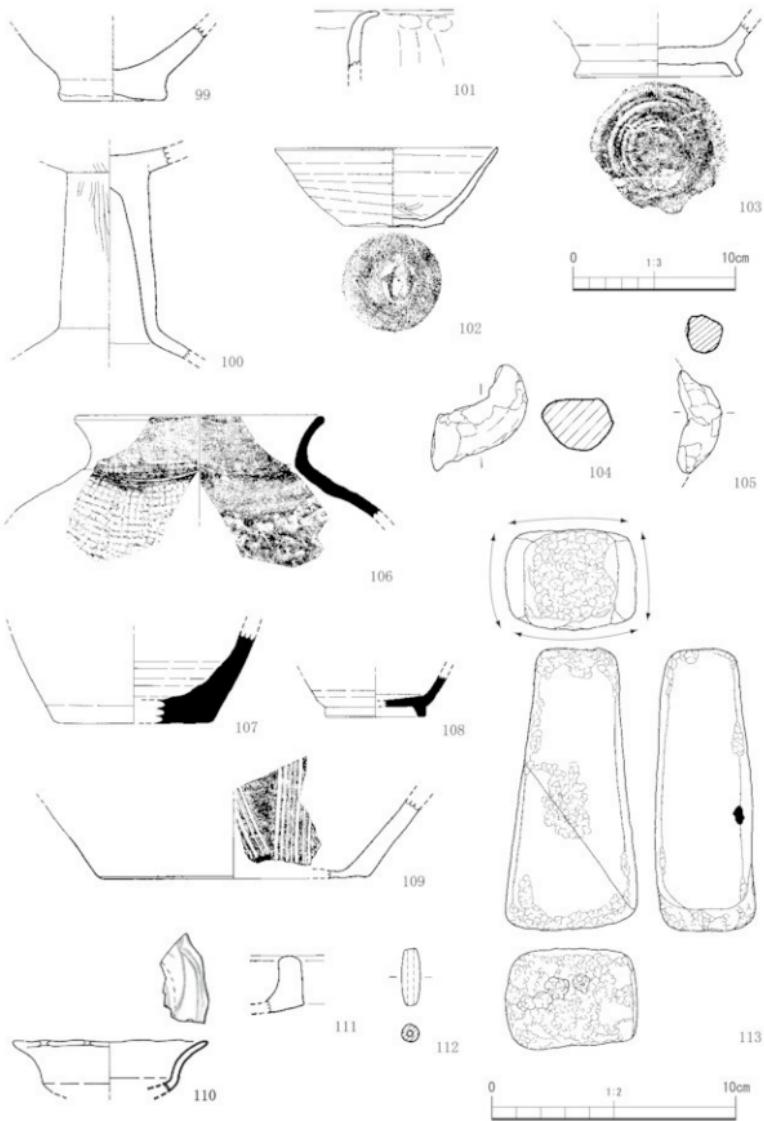
第5節 中世の遺構と遺物

土坑5（第25図） 調査区南側で検出された。調査区外に広がっているため平面形が不明瞭であるが、最大径4.85mの不整円形を呈すると推測される。埋土はⅡ層土に近い黒褐色土である。断面形はすり鉢状だが、縁辺部に緩やかな段がみられる。遺物は埋土中から少量出土した。96は須恵器甕である。97は青磁碗である。見込みに双魚文が施されている。98は白磁碗である。見込みに圓線を有し、外面下部は露体している。

第6節 その他の遺物

バックホウによる表土掘削時、及び調査区や壁面清掃時に出土した遺物を掲載する。詳細については第4～5表を参照されたい。

第25図 土坑5実測図 ($S=1/30$)、出土遺物実測図 ($S=1/3$)



第26図 その他出土遺物実測図 (S=1/3・1/2)

第2表 出土器観察表①

回収番号	歩道 等	種別	法量(cm)()/復元	色調		焼成	調査		出土(上:mm下:cm)		備考	実測番号
				器種	口径		底径	器高	外面	内面	A	
p.7 第4回	1	土師器 Tr.2 SA	14.6 10.8 13.45	7. SYB5/4 にぶい褐色	7. SYB6/2	良好	回転ナダ	不明	8 多	1 少	強く被熱している。环部を直口状に形成している。	121
	2	土師器 高杯	19.0	—	7. SYE7/4 にぶい褐色	7. SYE8/4	良好	回転ナダ	ハケメ、 ナダ	1 少	1 多	120
4	土師器 甕	(14.0)	—	10YR4/2 灰黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	良好	ナダ、 ナダ、 ヒビオサエ	ナダ、 ヒビオサエ	1.5 少	微 少	122	
5	土師器 壺蓋	9.6	—	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	堅韌	回転ナダ	回転ナダ	0.5 少	微 少	123	
6	土師器 Tr.4 SC 坪	12.55	— 4.0	7. 0YR6/4 にぶい褐色	7. 0YR5/4 にぶい褐色	良好	ナダ、 タズリ	ミガキ?	4 多	微 少	115	
7	土師器 高杯	—	—	10YR6/4 にぶい黄褐色	7. SYR5/3 にぶい褐色	良好	ミガキ、 ハケメ	ナダ	2 少	微 多	116	
8	土師器 Tr.5 SA 甕	(11.9)	— 4.0	7. SYR5/4 にぶい褐色	7. SYR5/2 にぶい褐色	良好	ミガキ	ミガキ	1 少	微 強	117	
9	土師器 鉢	10.6 6.0	5.9	10YR5/4 にぶい黄褐色	2. SYA4/1 黄灰	良好	ナダ、 ヒビオサエ	ナダ	4 少	ミ 多	118	
p.10 第4回	11	土師器 甕	— (8.3)	—	10YR7/2 灰黄褐色	10YR7/1 オーリップ瓶	良好	ナダ、 ヒビオサエ	ナダ	3.5 多	木の葉底	9
	12	土師器 甕	— (7.4)	—	2. SYA4/1 灰灰	2. SYR5/2 灰褐色	良好	ナダ、 ヒビオサエ	ナダ、 ヒビオサエ	4 少	2 少	3
13	土師器 鉢	(12.6)	—	SYR7/2 明褐色	SYR5/4 にぶい褐色	良好	ナダ	ナダ	3 多	2		
14	土師器 坪	(12.0)	—	7. SYR6/4 にぶい褐色	2. SYR6/6 褐色	堅韌	ミガキ	ミガキ	1 少	微 強	113	
15	土師器 坪蓋	—	—	10YR5/2 灰黄褐色	2. SYR5/1 灰灰	堅韌	自然釉	ナダ跡	微 強	1		
p.12 第9回	16	土師器 甕	— (7.6)	—	7. SYR7/2 明褐色	7. SYR7/1 灰白	良好	ナダ、 タズリ	ナダ	3 多	1 少	17
17	SAB 埴土	12.8	— 4.9	7. SYR5/4 にぶい褐色	7. SYR5/4 にぶい褐色	良好	回転ナダ、 にぶい褐色	回転ナダ、 ミガキ	微 強	微 強	10	
18	土師器 甕	(12.6)	—	7. SYR5/3 にぶい褐色	7. SYR5/4 にぶい褐色	良好	ナダ	ナダ	4 多	口唇部: 塗付着	34	
p.13 第10回	19	土師器 甕	(12.0)	—	10YR5/4 にぶい黄褐色	7. SYR5/4 にぶい褐色	良好	工具ナダ、 ナダ	ナダ	4.5 多		31
	20	土師器 甕	(13.9)	—	7. SYR6/2 灰褐色	7. SYR6/1 灰褐色	良好	工具ナダ、 ナダ	ナダ	5 多	外面: 塗付着	32
21	土師器 甕	—	— 5.0	10YR4/2 灰黄褐色	10YR3/1 灰褐色	良好	ミガキ	ナダ	7 多	1 少	スス付着	41
22	土師器 甕	(15.8)	—	2. SYA1/1 黒褐色	10YR4/1 暗灰	やや良	ナダ	ナダ	5 多	1 少	23と同一個体か	36
23	土師器 甕	— 5.85	—	2. SYR6/1 赤灰	10YR3/1 黒褐色	やや良	ミガキ、 ナダ	ナダ	6 多	1 少	22と同一個体か	37
24	土師器 甕	(6.0)	—	10YR5/3 にぶい黄褐色	7. SYR5/3 にぶい褐色	良好	ナダ、 ヒビオサエ	ナダ、 ヒビオサエ	9 多	木の葉底	20	
25	土師器 甕	— 7.7	—	7. SYR5/3 にぶい褐色	7. SYR5/2 灰褐色	良好	ナダ、 ヒビオサエ	ナダ	9 多	1 少	22	
26	土師器 甕	— (7.2)	—	10YR6/4 にぶい黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	良好	ナダ	ナダ	3 多		39	
27	土師器 甕	— 6.5	—	10YR6/4 にぶい黄褐色	N3/0 暗灰	良好	工具ナダ、 ナダ、 ヒビオサエ	ナダ	4 多	1 少	木の葉底	43
28	土師器 鉢	— 8.0	—	SYR6/3 にぶい褐色	10YR4/1 暗灰	良好	ナダ	ナダ	4 多	2 多		42

※出土 A: 宮崎小石 B: 長石、右美 C: 鋼石、角閃石、雲母 E: 黑染

第3表 出土器物観察表②

編號頁 回収番号	番 号	遺構 等	種別	法量cm () :復元	色調		焼成	調査		胎土 (上:mm 下:釐)					備考	実測 番号	
					器種	口径	底径	器高	外面	内面	A	B	C	D	E		
p.13 第10回	29		土師器 瓶	— — —	7. SYRS/2 灰褐色	10786/3 にぶい黄褐色	良好	ナダ	ナダ	5 多						外面:保村看	38
	30		土師器 坪	— — —	10786/4 にぶい黄褐色	10786/3 にぶい黄褐色	良好	ナダ、 ユビオサエ	ナダ	微 微 強							13
	31		土師器 坪	(11.0) — 4.2	SYRS/6 明赤褐色	7. SYRS/4 にぶい褐色	良好	ミガキ	ミガキ	1 少							12
	32		土師器 坪	(11.0) —	7. SYRS/4 にぶい褐色	7. SYRS/4 にぶい褐色	良好	ミガキ	ミガキ	微 微 強							29
SAS8 第8回	33		土師器 坪	9.1 — 3.3	7. SYRS/3 灰褐色	10784/2 にぶい褐色	良好	ミガキ	不明	1 少							110
	34		土師器 小型壺	— — —	7. SYRS/4 にぶい褐色	10784/2 灰褐色	良好	ミガキ ケズリ	ナダ	0.5 少							18
	35		土師器 樂器	— — —	10785/2 灰褐色	10785/2 灰褐色	堅韌	タタキ	当て具痕	1 強							21
	36		土師器 坪	(8.0) —	SYR4/1 灰	2. SYR1/1 灰	堅韌	凹輪ナダ	凹輪ナダ	微 強						外底面:回転ヘラ切り	19
	37	8.8 胎生 壺	— (7.0) —	7. SYRS/4 にぶい褐色	10785/2 灰褐色	良好	ナダ、 ユビオサエ タタキ	ナダ、 ユビオサエ タタキ	2 多								16
	38	胎生 馬	— — —	2. SYR3/3 黄褐色	7. SYRS/4 にぶい黄褐色	良好	ナダ、 ハケメ、 ナダ、 ユビオサエ	ナダ、 ハケメ、 ナダ、 ユビオサエ	1 少								15
p.14 第11回	50	SASカラ マダラ 上	土師器 坪	(14.2) (8.3) 4.8	N 4/0 灰	NS/0 灰暗	良好	ナダ→ ミガキ	ナダ→ ミガキ	0.5 少						黒色土器	40
	51		土師器 甕?	(13.8) —	SYRS/4 にぶい赤褐色	7. SYRS/4 にぶい褐色	良好	ナダ、 ユビオサエ	ナダ	1 少							24
	52		土師器 坪	11.6 — 4.7	7. SYRS/4 にぶい褐色	7. SYRS/4 にぶい褐色	良好	ミガキ	ミガキ	3 1 強						外底面:ヘラ記号あり	45
	53		土師器 坪	(13.9) —	7. SYRS/4 にぶい褐色	SYRS/3 にぶい赤褐色	良好	ミガキ	ミガキ	微 強						同じ個体か	27
	54		土師器 坪	(13.0) (8.0) 5.4	7. SYRS/4 にぶい褐色	7. SYRS/4 にぶい褐色	良好	ミガキ	ミガキ	微 強						同じ個体か	26
	55	SASカラ マダラ 下 基盤 蓋上中	土師器 坪	(8.9) —	2. SYR6/6 根	2. SYR6/6 にぶい赤褐色	良好	ミガキ	ミガキ	微						内外赤色顔料施付?	11
	56		土師器 坪	— — —	7. SYRS/6 根	7. SYRS/6 にぶい褐色	良好	ナダ	ナダ	微 強						カマド然然部底面出土 磨滅により調整不明瞭	23
	57		土師器 坪	— — —	7. SYRS/4 にぶい黄褐色	10785/3 にぶい黄褐色	良好	ナダ、 ミガキ	ナダ	微 強						摩滅により調整不明瞭	14
	58		土師器 高杯	(10.2) (7.0) 8.2	7. SYRS/4 にぶい根	7. SYRS/4 にぶい根	良好	ミガキ、 ユビオサエ	不明	1 微						茎み大	82
	59		土師器 高杯	(10.7) 6.7 (7.5)	2. SYR5/4 黄褐色	10784/3 にぶい黄褐色	良好	ミガキ	ミガキ、 ナダ、 ミガキ	1 1 少						茎み大	44
p.21 第18回	60		土師器 高杯	— 16.3 —	10785/3 にぶい黄褐色	7. SYRS/3 にぶい黄褐色	良好	ミガキ	ミガキ	5 少	2 多	2 少			脚部内面:ケズリ	33	
	61	SASカラ マダラ 設 裏	土師器 坪	— 6.4 —	10786/4 にぶい黄褐色	10784/2 明赤褐色	良好	ナダ	ナダ	6 多						口縁部が熱く受けた。 灰白色に変色	111
	62	SH100	土師器 高杯	10.8 6.8 4.6	10785/3 にぶい黄褐色	SYR8/2 灰白	良好	ミガキ、 ユビオサエ	不明	1 多							61
	63	SASカラ マダラ 設 裏	土師器 坪	(13.1) —	SYR7/2 坪	2. SYR8/6 明赤褐色	良好	ヨコナダ、 横位ケズリ	ヨコナダ	1 多							7
	64	SASカラ マダラ 設 裏	土師器 高杯	(16.8) —	SYRS/4 にぶい赤褐色	SYRS/4 にぶい赤褐色	良好	ナダ	ナダ	1 多							8
	65	SASカラ マダラ 設 裏	土師器 坪	— — —	7. SYRS/4 にぶい黄褐色	SYRS/6 明赤褐色	良好	ナダ	ナダ	1 少							4

※胎土 A:青褐色小石 B:長石・石英 C:輝石・角閃石 D:雲母 E:黑曜

第4表 出土土器観察表③

測定頁 回収番号	番 号	遺構 等	種別	法量(cm) 口径 底径 脚高	色 調	底成 外面 内面	調 整		胎土 (上:cm 下:mm)		備 考	実 測 番 号
							外 面	内 面	A B C	D E		
p.21 第19回	66	須恵器 环	(10.6)	—	—	N6/0	10YR5/2	堅韌 輪有り。 灰	輪無し。 輪ナダ	微 強		6
	67		須恵器 環	—	—	—	2. SY5/1	良好 灰	自然輪 当て具痕	1.5 多		5
	68	S42+ S25 杯蓋	(14.6)	—	—	SY5/1	10YR5/1	堅韌 灰	輪ナダ	微 強		64
p.22 第19回	71	S410 堆土 环蓋	(16.0) 高錐形	—	—	10YR5/1	N6/0	堅韌 灰	輪ナダ	微 強		46
	72	S410 + S414 环	(18.0)	—	—	10YR5/1	2. SY5/1	堅韌 灰	輪ナダ ヘラクリ ズリ	微 強		50
p.23 第20回	74	土解器 环	—	8.0	—	10YR5/2	2. SY4/3	良好 にぶい黄褐色 オーリーブ褐色	輪ナダ コビオサエ	1 少	外底面:回転ヘラ切り	49
	75	S414 灰	—	7.2	—	SYR6/6	SYR6/6	良好 橙	輪ナダ	2 少		47
	76	S414 堆土 燒口器	—	—	—	SY6/1	2. SY6/2	堅韌 灰	タキ 当て具痕	2 少		48
	80	SC15 环	—	6.0	—	SYR6/6	SYR5/4	良好 橙	輪ナダ	1 少	外底面:回転ヘラ切り	51
p.27 第21回	83	SE11 燒口器	—	—	—	10YR7/1	10YR7/1	堅韌 灰白	タキ 当て具痕	0.5 少		57
	84	SE10 环	—	—	—	10YR5/2	10YR6/3	堅韌 灰黃色 にぶい黄褐色	輪ナダ	微 強		56
	85	SE4 环	—	7.6	—	7. SYR6/6	7. SYR5/4	良好 橙 にぶい黄褐色	輪ナダ	1 少	外底面:放射状調整痕	53
	86	SE4 环	—	7.4	—	SYR6/6	SYR5/4	良好 橙 にぶい黄褐色	輪ナダ	1 少		54
	87	SE4 环	—	(6.4)	—	2. SY5/1	2. SY5/1	堅韌 灰	輪ナダ	微 強		52
	88	SE4 环	—	(7.9)	—	SYR5/2	10YR6/2	堅韌 灰	輪ナダ ユビオサエ	微 強		56
	90	SE04 燒	—	—	—	7. SYR6/3	7. SYR6/4	良好 にぶい橙 にぶい橙	輪ナダ 段位ケズリ	2 少	外面:側付着	59
p.28 第24回	91	SE05 环	(14.8)	—	—	10YR5/2	2. SY5/2	良好 灰黃色	輪ナダ	0.5 少		112
	92	須恵器 环	—	—	—	7. SYR6/4	7. SYR7/2	良好 にぶい橙	輪ナダ	微 強		58
	93	SE55 环蓋	(13.8)	—	3.0	10YR5/1	2. SY5/1	堅韌 灰	輪ナダ ヘラクリ ズリ	0.5 少		114
	94	SE09 燒口器	—	—	—	10YR6/2	2. SY6/2	堅韌 灰黃色	タキ 当て具痕	微 強		60
	96	須恵器 燒	—	—	—	N3/0	SYR6/1	堅韌 灰	輪ナダ	1 多		65
p.29 第25回	97	SC5 青磁 碗	(6.0)	—	—	10Y7/1	10Y7/1	良好 灰白	輪ナダ		見込み:二重圓錐、双魚文	63
	98	白磁 碗	—	—	—	SY7/2	SY7/2	良好 灰白	輪ナダ			62
	99	調査区 土解器 燒	(6.0)	—	—	10YR5/2	7. SYR5/2	良好 灰黃色	ナダ ユビオサエ	3 多	被熟	73
p.30 第26回	100	調査区 土解器 高杯	—	—	—	SYR5/4	10YR4/2	良好 にぶい赤褐色	ミガキ ナダ ケズリ	1 少	外面:赤色顔料塗付	77
	101	包含層 須恵器 燒	—	—	—	7. SYR5/2	10YR5/2	良好 灰黃色	ナダ ユビオサエ	4 多		78

参考上: A:青白小石 B:長石, 石英 C:輝石, 青閃石 D:雲母 E:黒曜

第5表 出土土器観察表④

地蔵頁番号	品番号	造形	種別	法量(cm)	()復元	色調	構成	調査		胎土(上:mm下:mm)					備考	実測番号
								外	内	A	B	C	D	E		
1.30 第20回	102	IV層	土師器 环	(13.4)	6.2	4.9 に赤い黄褐色	107R6/3 に赤い黄褐色	7.35R6/4 に赤い黄褐色	良好	回転ナブ ミガキ	1 無 強	少			外底面:回転ヘラ切り	28
103	II層	—	土師器 环	(10.4)	—	7.35R6/6 に赤い黄褐色	7.35R6/4 に赤い黄褐色	良好	回転ナブ ミガキ	無	無	強				67
104	調査区 一話 瓶	—	—	—	—	7.35R6/3 に赤い黄褐色	—	—	良好	ナダ。 スピオサエ	—	3	強			76
105	調査区 一話 瓶	—	—	—	—	7.35R6/6 明褐色	—	—	やや良 ナダ。 スピオサエ	—	1	強	少			75
106	包含層 一話 壺	(15.6)	—	—	—	107R5/1 褐色	7.35R5/1 褐色	聖穂	タキ 回転ナブ	当て具痕、 回転ナブ	無	強				79
107	調査区 一話 壺	—	(9.7)	—	—	2.35Y6/1 黄褐色	2.35Y6/1 黄褐色	聖穂	回転ナブ	—	—					69
108	調査区 一話 杯	—	(6.0)	—	—	2.35Y6/2 灰黄	2.35Y6/2 灰黄	良好	回転ナブ	回転ナブ	強	少				70
109	調査区 陶器 擂鉢	—	(16.2)	—	—	2.35Y6/2 灰赤	108R3/4 灰赤	良好	回転ナブ	回転ナブ、 カキメ	2	多		備前燒		68
110	調査区 青磁 一話 瓶	(11.8)	—	—	—	2.35Y6/1 オリーブ灰	2.35Y6/1 オリーブ灰	良好	回転ナブ	回転ナブ						81
111	調査区 一話 筋格	—	—	—	—	7.35R6/4 に赤い縁	7.35R6/4 に赤い赤褐色	良好	回転ナブ	回転ナブ	1 少	1 多	1 強			74
112	調査区 土製品 一話 土鏡	長3.5、幅1.1	—	—	—	107R6/2 灰黃褐色	—	良好	ナダ。 スピオサエ	ナダ。 スピオサエ	1 強					73

胎土 A:宮崎小石 B:白石 C:脚石,角閃石 D:雲母 E:黑鐵

第6表 出土石器計測分類表

地蔵頁番号	国番号	地蔵頁番号	遺構等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重積 (g)	備考	実測No.
p.7	第4回	3	試掘Tr.2	砾石	砂岩	4.5	4	3.8	93.2		118
p.9	第6回	10	Tr. IX層	剥片	頁岩	2.5	1.85	5.5	2.2		198
p.14	第11回	39	SAB粘土床	砾石	砂岩	3.9	3.7	1.7	30.6		87
		40	SAB床	砾石	砂岩	20.9	11.9	9.6	304		85
		41	SAB	砾石	砂岩	9.2	9.7	2.5	409.7		86
p.15	第12回	42	SAB	砾石	砂岩	18.1	11.1	6.6	1600		91
		43	SAB	砾石	砂岩	17.65	5.75	5.3	529.4		90
		44	SAB	砾石	砂岩	15.1	7.4	3.7	557.6		92
		45	SAB	砾石	砂岩	7.7	5.35	2.4	135.4		88
p.16	第13回	46	SAB7	砾石	砂岩	22.25	11.15	8.8	2650		107
		47	SAB7	砾石	砂岩	21.05	15.95	10.2	2960		105
p.17	第14回	48	SAB7	砾石	砂岩	18.2	10.6	7.1	1840		106
		49	SAB7	砾石	砂岩	27.7	16.8	12.3	8500		89
p.21	第18回	69	SAB7	砾石	砂岩	15.7	9.9	2.9	670		83
		70	SAB7	砾石	砂岩	12.5	9.4	4.1	731.8		84
p.22	第19回	73	SAB7	砾石	砾灰岩	8.95	8.5	4.55	285.5		94
p.23	第20回	77	SAB7	砾石	砂岩	11.4	4	2.1	110		98
		78	SAB7	砾石	砂岩	13.85	8.45	4.25	561.9		96
		79	SAB7	砾石	砂岩	10.75	6.3	3.8	387.7		99
p.25	第21回	81	SC15	剥片	頁岩	4.9	2.15	2.2	227		101
		82	SC15	砾石	砂岩	9.65	9.7	2.8	827.6		100
p.27	第22回	89	SC4	砾石	砂岩	16.8	11.2	7.6	1653.6		102
p.28	第24回	95	SC13	砾石	砂岩	10.3	9.7	4.4	611.8		104
p.30	第26回	113	—	砾石	砂岩	11.6	5.4	4.2	377.8		105

()の値は残存値を示す



調査区空中写真（南東より平和の塔を望む）

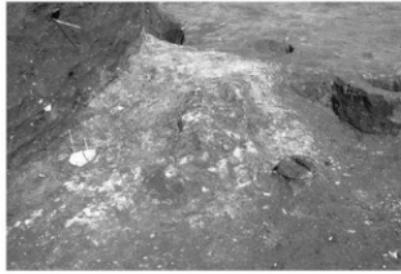


早期ロームトレンチ（南から）



縄文時代早期出土遺物

図版2



1段目左：竪穴建物1（西から）

1段目右：竪穴建物1出土遺物

2段目左：竪穴建物6（西から）

2段目右：竪穴建物6出土遺物

3段目左：竪穴建物9（南東から）

3段目右：竪穴建物8遺物出土状況（東から）

4段目左：竪穴建物8カマド検出状況（南から）



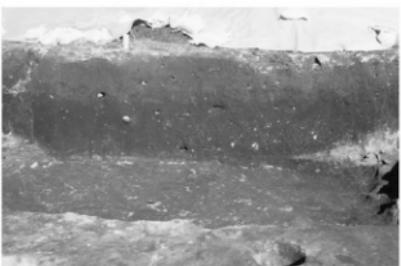
カマド崩落土中遺物出土状況①（東から）



カマド崩落土中遺物出土状況②（南東から）



カマド機能面（南から）



竪穴建物8南北土層（東から）



竪穴建物8出土土師器・須恵器



竪穴建物8カマド周辺出土遺物



竪穴建物3（南東から）



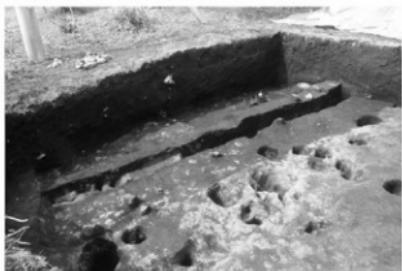
竪穴建物3出土遺物



竪穴建物2（南東から）



竪穴建物2柱穴櫛出土状況（南から）



- 1段目左：竪穴建物2出土遺物
1段目右：竪穴建物10・14検出状況（南東から）
2段目左：竪穴建物14出土遺物
2段目右：竪穴建物10（北東から）
3段目左：竪穴建物10地床炉土層（北から）
3段目右：竪穴建物10出土遺物
4段目左：竪穴建物群完掘状況（東から）

図版6



土坑15出土遺物



溝状遺構10~13（南東から）



溝状遺構出土遺物



土坑5出土遺物



その他出土遺物

第Ⅳ章 まとめ

調査成果の概要 本調査区からは、確認調査を含めると縄文時代早期、古墳時代、古代、中世、近世の遺構、遺物が確認されたことになる。縄文時代早期の遺物は賀貢製剝片が1点出土したのみであるが、下郷地区で早期ローム層中に文化層の存在を確認できたのは注目すべき成果といえる。以下では、本調査区の中心となった古代の堅穴建物群について考察する。

堅穴建物群について 本調査区からは8棟の堅穴建物が検出された。最も残存状況が良好であった堅穴建物8は、床面とカマド周辺の出土土師器から7世紀中葉（松永・今塩屋2002）に位置づけられるが、床面出土須恵器坏（36）は高台の形状は8世紀後半以降（竹中2010）に位置づけられるものであり、時期差がみられる。しかし、本建物から須恵器の出土は2点しかなく、遺構の切り合いを見逃した可能性も捨てきれないため、建物の時期は床面及びカマド周辺出土土師器の年代観から7世紀中葉としておきたい。堅穴建物8以外は出土遺物が少量かつ小破片であり時期の比定が困難だが、堅穴建物14は床面出土土師器坏の形状からおおよそ9世紀前半に位置づけられよう。建物の主軸方向をみると、①堅穴建物9、②堅穴建物8（堅穴建物6）、③堅穴建物1、2、3、10、14の3グループに分類することができる。この内③の堅穴建物2、3と10、14は、主軸を同一にしつつ位置をずらして重複していることから、短期間のうちに建物の建替えが行なわれた可能性が考えられる。類似する重複関係は、近接する下郷第4遺跡（宮崎市教育委員会2009）でも確認されている。こうした主軸方向を同一とする建物群が比較的近い時期に属すると仮定すれば、建物の重複関係と出土遺物の年代観から、①→②→③という建物群の変遷を推測することができる。以上のように、本調査区では概ね7世紀中葉～9世紀前半にかけて集落が営まれており、堅穴建物8に先行する堅穴建物9については、7世紀前葉以前にさかのほる可能性も考えられる。

カマドについて 堅穴建物8のカマドは、形態的には今塩屋II b類（今塩屋2006）に近い形態のものである。煙道部はカマド天井部及び奥壁の一部が廃棄時に破壊されていることから調査時に明確にできなかったが、土層の観察から本来は煙道を有するとみられる。堅穴建物8で確認されたカマド祭祀は、カマド本体の破壊と土師器の埋設、混入、あるいは破壊を伴うものであり、宮崎平野部の古代カマド祭祀の一例として注目される資料といえる。

【参考文献】

- 今塩屋毅行 2006『第Ⅳ章 まとめ（古墳時代）』『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 今塩屋毅行・松永幸寿 2002『日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心にして－』『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 同実行委員会
- 竹中克繁 2010『日向国における古代土器の変遷－宮崎平野部の須恵器・土師器編年－』『先史学・考古学論究V』下巻 龍田考古学会
- 宮崎市教育委員会 2009『下北方下郷第4遺跡』宮崎市文化財調査報告書第74集

報告書抄録

ふりがな	しもきたかたしもごうだいごいせき						
書名	下北方下郷第5遺跡						
副書名	平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金対象事業発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第112集						
編集者名	河野 裕次						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL (0985) 21-1836						
発行年月日	2016年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
しもきたかたしもごうだいごいせき 下北方遺跡群	みやざきし 宮崎市 しもきたかたしもごうだいごいせき 下北方町下郷 6083	45201	21-079	31° 56' 38" 付近	131° 24' 57" 付近	20150203 ~ 20150320	2565m ²
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
共同住宅建築	散布地 集落 古墳 社寺跡	縄文時代早期		剥片			
		古墳		土師器			
		奈良・平安	竪穴建物 土坑 溝状遺構 柱穴	土師器 須恵器 敲石 砥石			
		中世・近世	土坑	土師器 青磁 白磁			

宮崎市文化財調査報告書第112集

下北方下郷第5遺跡

平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金対象事業
発掘調査報告書

2016年3月

発行 宮崎市教育委員会